三重県埋蔵文化財調査報告　186－1

一般国道475号東海環状自動車道

東　村　城　跡

発 掘 調 査 報 告

2000・3

三重県埋蔵文化財センター

序

員弁郡は三重県でも北部に位置しています。滋賀県との境をなす鈴鹿山脈、岐阜県との境をなす養老山地、その間をぬって流れる員弁川と、まさに山紫水明の地であります。四季の変化も美しく自然の恵を受ける豊かな土地です。古来から近江や美濃との行き来が盛んで豊かな文化を育んできました。

弥生時代に大安町の宮山遺跡で石斧の製作が行われたことも員弁の育んだ文化のひとつといえましょう。また、戦国時代に、北畠氏や長野氏、関氏といった戦国大名が育たず中小の土豪が割拠したのも隣国との行き来が盛んであったことと無関係ではないかもしれません。

員弁郡内には、彼らの城跡が数多くあり、丹生川上城や山田城などが調査されています。今回調査された東村城跡も、そうした中小土豪のひとりが拠った城の一つだったのでしょうか。東村城跡では、残念ながら明確な城の遺構は発見されませんでしたが、丘陵上から眺める員弁川や養老の山々、そして藤原岳は美しく、数百年の時を越えて当時のひとびとが行き来したようすを彷彿とさせてくれます。

調査を終えたところにはやがて新しい道路が開通し、地域と地域を結ぶ新しい文化の道となることでしょう。そのいわば代償として発掘された遺跡の膨大な記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第です。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　　大井　與生

例　言

1．本書は、三重県員弁郡北勢町東村に所在する東村城跡の発掘調査報告書である。東村城跡の本調査は、平成６・７年度の２カ年にわたったが、本書では２年分の調査区を一括して報告することとする。

2．調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局の委託を受け、平成６年度に範囲確認調査(試掘調査)を実施後平成６年８月～11月と平成７年４月～６月に本調査を実施した。また、平成９年度にも範囲確認調査を実施したが、同年度の調査区は本調査の必要なしと判断した。整理・報告書作成業務は平成８年度から10年度に実施し、平成11年度に報告書を刊行した。調査にかかる費用は建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．調査は下記の体制で行った。

・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課第一係
・調査協力　東員町教育委員会
　　北勢町教育委員会
・現場作業　社団法人中部建設協会

4．東村城跡の現地調査は、平成６年度に小菅文裕が、平成７年度に小菅文裕・清水弘之が担当した。平成９年度の範囲確認調査は、森川幸雄が行った。

5．本書作成にかかる報文執筆は清水が中心となり今尾宏記と本堂弘之が行い、森川・本堂が全体をまとめた。

6．室内整理については、釜谷実加代・宮本理美・藤田有紀・樋口　愛・並河かおり・新貝里美・山中陽子・長野恵子の協力を得た。また、調査補助員として日紫喜勝重・長野恵子が現地調査および整理作業に携わった。

7．発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。なお、第５・６図の縄張図は、伊藤徳也氏作成による。(順不同・敬称略)

伊藤徳也（三重県立神戸高等学校）・岩野見司（東海学園女子短期大学）・岩花季弐　日下徳重（大安町郷土資料館）・上村安生（斎宮歴史博物館）・大塚由良美（桑名市教育委員会）・尾野善裕（京都国立博物館）・田中欣治（津市立三重短期大学）・松本　覚（藤原町立白瀬学校）・八賀　晋（三重大学名誉教授）

8．本書所収遺跡については、既に『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ（三重県埋蔵文化財センター　1995)、『同』Ⅱ（同　1996)、『同』Ⅳ（同　1998)、『東海環状自動車道発掘調査ニュース』２・４にその調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

9．本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。当該遺跡では磁北はＮ６°50′Ｗ座標北から振れている。(平成６年度)

10. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

11. 本書に用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお、遺構の名称・番号は、調査時点および調査途中の概報での呼称を踏襲せずに、新たに改称したものである。

ＳＡ　土墨　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　中世墓　　ＳＺ　その他の遺構

12. 本書で使用した漢字は以下の通り統一した。

「わん」・・・「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。
「つき」・・・「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。

13. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

序
例言
目次
Ⅰ　前　言……1
　1　東海環状自動車道の概要……1
　2　調査に至る経過……1
　3　調査前の現況……1
　4　調査の経過と体制……1
　5　調査の方法……2
Ⅱ　位置と環境……5
　1　地理的環境……5
　2　歴史的環境……5
　3　東村城跡の立地と周辺の状況……7
Ⅲ　調査の成果……11
　1　基本層序……11
　2　遺構と遺物……11
　（1）概要……11
　（2）奈良時代……11
　（3）鎌倉時代……15
　（4）時期不明の遺構……16
　（5）包含層・その他の出土遺物……19
Ⅳ　結語……25
　1　「東村城跡」について……25
　2　遺構について……25
報告書抄録……37

挿図目次

第1図　小地区割図……3
第2図　遺跡位置図……4
第3図　員弁川周辺地形模式図……5
第4図　遺跡周辺地形図……8
第5図　楠の下荘跡縄張図……8
第6図　東村城縄張図……8
第7図　調査区位置図……9
第8図　調査区南西壁土層断面図……12
第9図　遺構配置図……13～14
第10図　ＳＫ１平面図・土層断面図……15
第11図　ＳＫ１遺物出土状況図・断面図……16
第12図　ＳＫ１出土遺物実測図……16
第13図　ＳＸ２平面図・断面図……17
第14図　ＳＸ２出土遺物実測図……17
第15図　ＳＫ３～５・８平面図・断面図
　　ＳＫ７平面図・土層断面図……18
第16図　包含層出土縄文土器・石製品実測図……20
第17図　包含層出土弥生土器実測図①……21
第18図　包含層出土弥生土器実測図②……22
第19図　包含層出土近世遺物実測図……22

表 目 次

第１表　路線上遺跡一覧……3
第２表　遺物観察表（１）……23
第３表　遺物観察表（２）……24

写真図版目次

ＰＬ１　調査区遠景（東から）、同（北から）
ＰＬ２　神ケ崎地内の城館（東から）、同（南から）
ＰＬ３　調査区全景（左上が北）、同（東から）
ＰＬ４　ＳＤ11～13（北東から）、ＳＡ９・ＳＤ11・12（北から）、ＳＤ13・14（北から）
ＰＬ５　ＳＫ１・ＳＸ２
ＰＬ６　ＳＫ３～５・７・８、作業風景
ＰＬ７　ＳＫ１・ＳＸ２・包含層出土遺物
ＰＬ８　包含層出土遺物
ＰＬ９　包含層出土遺物

Ⅰ　前　　言

1　東海環状自動車道の概要

東海環状自動車道は、名古屋市を中心とする 30～40km圏に位置する四日市市・大垣市・岐阜市・瀬戸市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ、延長 160km の高規格幹線道路である。名古屋市と周辺都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和を図り、都市全域の道路機能の回復を図るものである。三重県の北勢地域では道路網の充実、四日市港の集積の拡大による活性化、内陸部の適正な開発等に寄与することが期待されている。

三重県内における当自動車道は、四日市北ＪＣＴで第二名神自動車道と分岐後、員弁川の右岸を北上し、東員町・員弁町・大安町を通り北勢町に至る。その後、岐阜県養老町と連絡する計画となっている。

平成２年度に「一般国道475号東海環状自動車道(北勢～四日市)」として員弁郡北勢町阿下喜～四日市市北山町の区間、延長 14.4kmが事業化された。また、平成４年１月 21 日に三重県知事により「東海環状自動車道」の都市計画化が決定された。計画区間は四日市市伊坂町から員弁郡北勢町阿下喜で、計画延長は 18.7kmである。

2　調査に至る経過

事業計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、平成２年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、建設省中部地方建設局と三重県教育委員会が、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。なお、調査にあたっては「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」にもとづき、東員町教育委員会から１名（平成７～９年度)、北勢町教育委員会から１名(平成 10 年度～）の派遣職員を得ている。また、現地作業は作業員の安全確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で平成６年４月１日付けで「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結している。

3　調査前の現況

当調査区が所在するのは現在の東村の集落を乗せる台地の北側に突出した尾根部であり、通称「権現山」と呼ばれ、標高約103mである。調査区を含め、尾根の上部はかなり平坦である。

調査区は平坦部と斜面部に大別でき、平坦部のほとんどは畑に利用され、斜面部は植林されていた。

調査区北の尾根部の先端は平坦部も斜面も植林がなされているが、木で遮られることさえなければ、直下の員弁川右岸の水田地帯（標高 80m程）をはじめとして、北西東の３方向を中心にかなり広範囲にわたり視界が広がる。

4　調査の経過と体制

東村城跡の現地調査は、東海環状自動車道本線部分の 4,950m²を調査対象とし、平成６～７年度及び、平成９年度に実施した。

〔平成６年度〕

中世城跡の可能性を考え、平成６年７月に調査前地形測量から開始した。その後、８月に範囲確認調査を行い、弥生土器小片などが認められたため、８月９日～11 月１日に、斜面部を中心にした 2,020m²の本調査を第１次調査として行った。

〔平成７年度〕

上部平坦部を中心にした 1,130m²を第２次調査として平成７年４月 20 日～６月 30 日に行った。

奈良時代と中世の遺構を検出したほか、ほとんどが小片であるが、弥生土器が出土した。広範囲にわたる遺構のため、航空写真測量を実施した。

〔平成９年度〕

平成９年９月 16・17 日に、平成６・７年度の調査区からは北側へ一段低い部分の範囲確認調査を行った。現況は製材所の敷地として盛土されているが、

以前は階段状の水田であったと思われる。対象範囲は 1,000㎡で、試掘面積はトレンチ１本（1.8m×27m）と試掘坑２カ所（各４m×４m）の合計 80㎡である。近世以降のものと思われる陶磁器片２点以外には遺構・遺物は検出されず、当調査区は本調査から除外した。

資料整理・報告書作成業務は平成８～10 年度に実施し、平成 11 年度に報告書を刊行した。

平成６～11 年度の体制は以下のとおりである。

〔平成６年度〕

主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第一係長　河北秀実
主　事　清水正明・小菅文裕

〔平成７年度〕

主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第一係長　清水正明
主　事　小菅文裕
技　師　竹内英昭
主　事　清水弘之
（東員町教育委員会から派遣）

〔平成８年度〕

主幹兼調査第二課長　山田　猛
主査兼第一係長　清水正明
主　事　片岡　博
技　師　竹内英昭
主　事　清水弘之
（東員町教育委員会から派遣）

〔平成９年度〕

主幹兼調査第二課長　山田　猛
第一係長　森川幸雄
主　事　片岡　博
技　師　杉﨑淳子
主　事　清水弘之
（東員町教育委員会から派遣）

〔平成 10 年度〕

主幹兼調査第二課長　吉水康夫
第一係長　森川幸雄
技　師　杉﨑淳子
主　事　今尾宏記
（北勢町教育委員会から派遣）

〔平成 11 年度〕

主幹兼調査第二課長　吉水康夫
主査兼第一係長　本堂弘之
技　師　角正芳浩
主　事　今尾宏記
（北勢町教育委員会から派遣）

5　調査の方法

東海環状自動車道の調査では、調査区の地区割りは国土座標軸の100m単位四方を大地区に設定し、その中を縦（南北）横（東西）それぞれ25等分した４m四方を小地区とする方法を用いている。しかし、当調査区は100m四方におさまるにもかかわらず、この方法では大地区が２つになり煩雑となる。そこで、大地区割りを用いず小地区割りのみとし、X=－95,488を南北方向基準ラインに、Y=47,364を東西方向基準ラインに設定し、この基準線をもとに４m×４mの小地区を設定し、南北方向は北からＡ～Ｚのアルファベット、東西方向は西から１～25 の番号を与え、この２つの組み合わせで小地区名を表現することとした。（第１図）遺構カード（1/40 の遺構略測図）の作成や遺物の取り上げについては、この小地区名を用いた。

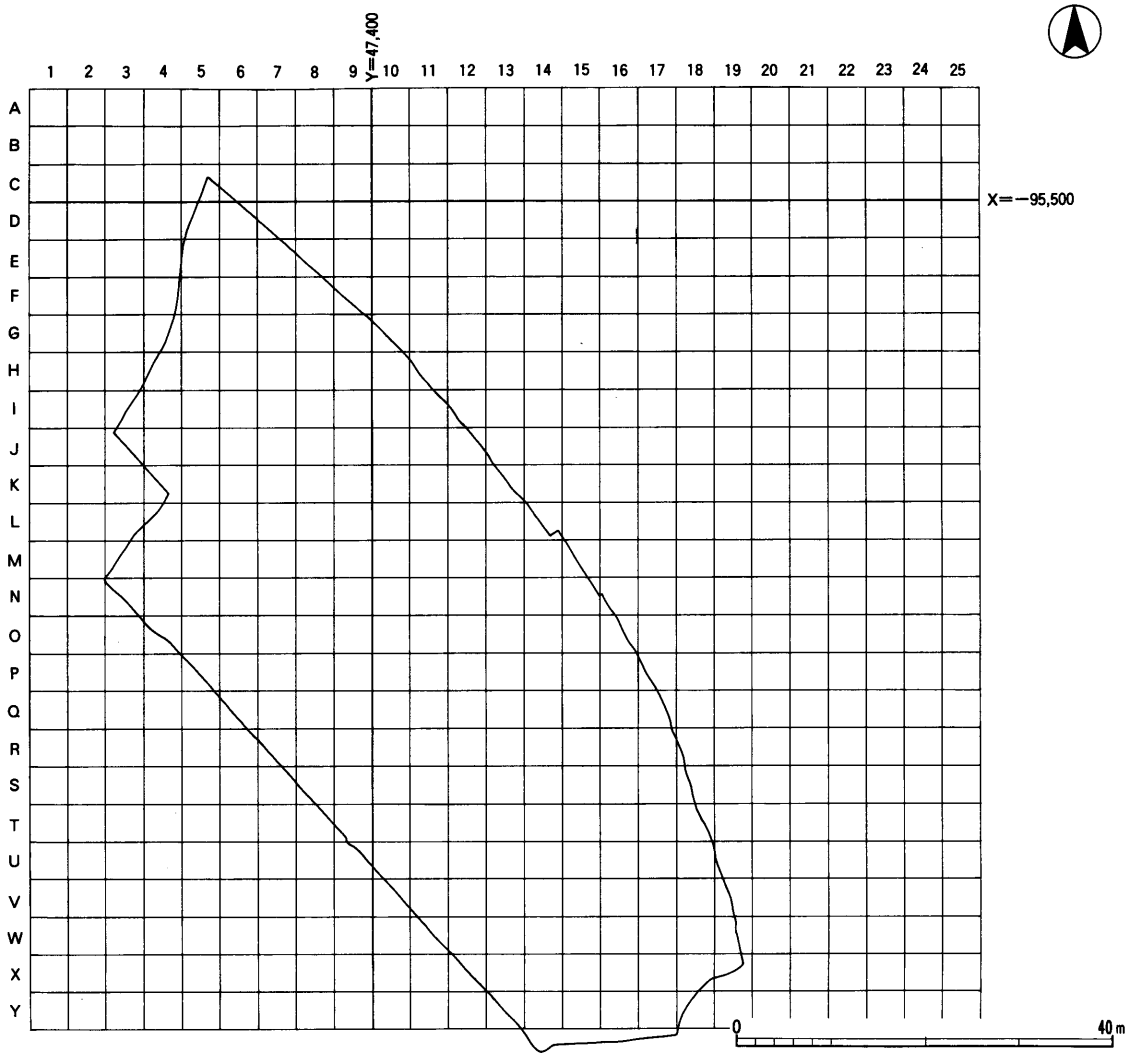
個別遺構の実測は、平面図・断面図・土層断面図について、1/10 または 1/20 で必要に応じて行った。調査区全体の測量は、平成６年度の事前地形測量・調査後の測量は平板測量で、平成７年度の調査後の測量は航空測量でおこなった。航空測量図面以外の実測図面には、６・７・９年度通して３桁のナンバーを与え、別に図面一覧表を作成して管理できるようにしている。

写真は、白黒及びカラーリバーサルフィルムを用い、35㎜判・ブローニー判・４×５判で撮影した。各カット毎の内容を記した一覧表を作成している。

出土遺物は、実測するものとそうでないものに分け、遺構別にコンテナに入れて収蔵している。コンテナには箱番号を与え、別に一覧表を作成している。

実測された遺物は、実測図と照合できるよう遺物と図面の両方に登録番号を記入している。さらに、報告書掲載遺物は、報告書の番号と同じ図版番号を与えている。両者は本書の遺物一覧表で対照できる。

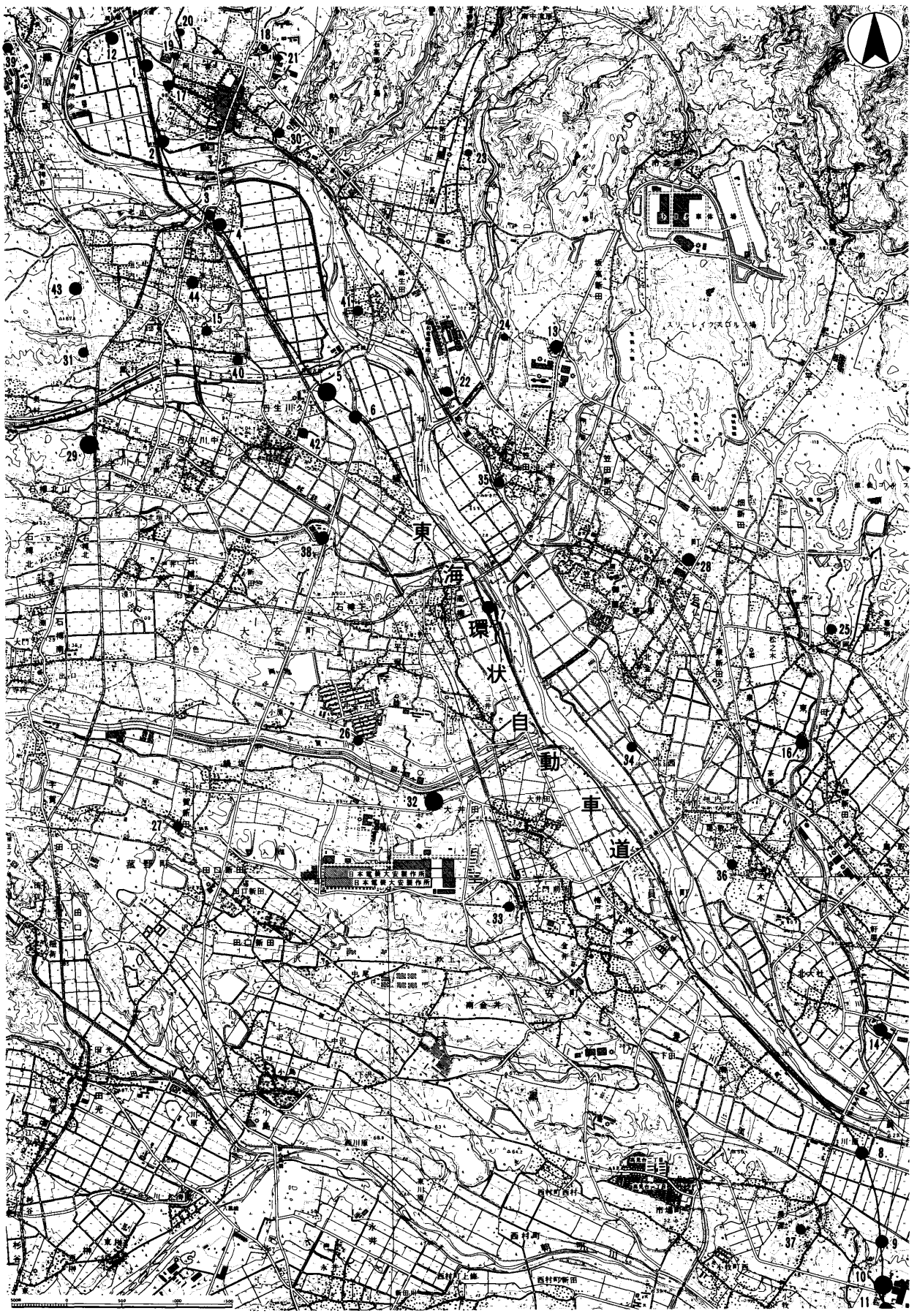
（清水・本堂）



第１図　小地区割図（１：800）

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	本調査年度	本調査済面積(m²)	備　　考
1	上惣作遺跡	員弁郡北勢町阿下喜字上惣作ほか	平成７～９・11	11,780	現地調査済
2	覚正垣内遺跡	員弁郡北勢町阿下喜字覚正垣内ほか	平成８・10・11	2,670	現地調査済
3	東村城跡	員弁郡北勢町東村	平成６・７	3,150	現地調査済
4	権現坂遺跡	員弁郡北勢町東村	平成６・８	3,186	現地調査済
5	宮山遺跡	員弁郡大安町丹生川久下･片樋字宮山	平成７	12,260	1,050m² 残
6	大久保城跡	員弁郡大安町片樋字大久保	平成８	1,420	現地調査済
7	高柳遺跡	員弁郡大安町高柳	―――	―――	土取りのため消滅
8	川原遺跡	員弁郡東員町長深字川原	―――	―――	範囲確認調査のみ
9	広山Ｂ遺跡	員弁郡東員町長深字広山			11年度以降調査予定
10	広山遺跡	員弁郡東員町長深字広山			11年度以降調査予定
11	筆ヶ先古墳群	四日市市小牧町字筆ヶ先			12年度以降調査予定

第１表　路線上遺跡一覧　　(1999. 12)



第２図　遺跡位置図（１：50,000）　　（国土地理院　１：25,000 阿下喜・菰野・弥富・桑名）

Ⅱ　位置と環境

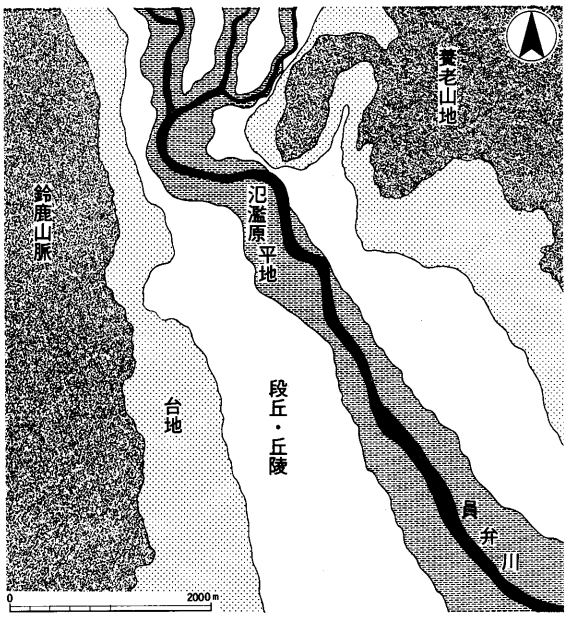
1　地理的環境

員弁郡は、三重県北勢地方の最北部に位置し、滋賀・岐阜県と接する。藤原・大安・北勢・員弁・東員の５町から成り立ち、北東の養老山地、西の鈴鹿山脈に挟まれ、中央の平地を員弁川が流れる。員弁川は両山地から流れ出る支流と合わさって桑名市に入り、町屋川と名前をかえ伊勢湾に注ぐ。

員弁川に沿った低地と山地の間は台地・丘陵・平地の３つに分かれ、それぞれの境は急傾斜をなしている。低地には河岸段丘が広く発達して、氾濫原平地となっている。

員弁郡を含む周辺一帯は約300万年前から150万年前に濃尾平野から北勢地方にかけて存在した東海湖によって水没していた。そしてその時代の堆積による東海層群によって基盤層が形作られている。東海層群は本来水平であったはずであるが、鈴鹿山脈の隆起などの地殻変動の力が働いて、基盤層はすべて傾斜をなしている。

山地から続く台地は、河川が山地を侵食して土砂を押し出し、平坦地に出る時に流速を失って谷の出口に堆積されて出来た扇状地である。員弁川を境にして東側は養老山系の古い礫層を含む扇状地で、西側は鈴鹿山脈から流れ出る河川によって作られた扇状地であり、その地質には違いが見られる。



第３図　員弁川周辺地形模式図（１：75,000）

このように、二つの山脈に挟まれた扇状地の扇端部をぬって流れる員弁川は長い間に氾濫を繰り返し、何度も流路を変えながらこの地域の地形を作り上げてきた。上流から運ばれた土砂によって中洲や氾濫原などの丘陵部の平坦面が形成され、氾濫による流路の変化や網状流と呼ばれる分流によって丘陵部が侵食され段丘状に変化していった。

員弁川によって形成された河岸段丘は、生活の場として耕地や集落を発達させている。特に員弁川左岸では多くの段丘が発達している。右岸にも規模は小さいが幾段にもなった段丘地形がみられる。員弁川両岸の河岸段丘の形成は数十万年前の更新世中期まで遡るとされている。

2　歴史的環境

当地域においての歴史は、旧石器時代まで遡る。旧石器時代に所属すると思われる遺物が発見されたのは藤原町内で尖頭器が採集されたのが最初の例である。その後、昭和61～63年に行われた分布調査では藤原町内でナイフ型石器が発見され、更に鷲野憲成氏の分布調査により、員弁町・北勢町・東員町などの標高60～100m前後の丘陵先端部で、石刃・石核・ナイフ型石器・スクレーパー、楔形石器などが発見されている。素材はチャートが多いが、中には黒曜石もみられる。石刃やそれを素材とするナイフ型石器は概ね小型で、三重県北勢地域の他の報告例と共通する。ナイフ型石器の中には「背付き石器」と呼ぶべき例や、背部調整に疑問がある例も若干含まれる。北勢町の川向遺跡[①]（12）の発掘調査では、ナイフ型石器と見られる遺物が出土しており、当地域の歴史は旧石器時代まで遡ることは確実であると考えられる。

縄文時代は、比較的豊富な資料が出土している。員弁町の北野遺跡[②]（13）では県内でも希少な前期の竪穴住居や石鏃などの石器・前期から晩期の土器が出土している。東員町の山田遺跡[③]（14）では晩期の

合口甕棺が出土している。また、川向遺跡でも中～後期の住居跡・野外炉などの遺構が検出され、石棒・石錐などの石器や土器が出土している。東海環状自車道の調査においても大安町の宮山遺跡[4]（５）や北勢町の覚正垣内遺跡[5]（２）で石鏃・石錘などの石器や土器が出土している。その他にも員弁川支流の宇賀川流域にある大安町の照光寺遺跡や野々田遺跡、北勢町の中山遺跡（15）などで縄文時代の遺物が採集されている。これらの遺跡は未調査部分が多いが、遺物量も豊富で、今後の調査に期待ができる。

弥生時代は調査例が少なく、わずかに北勢町の川向遺跡の包含層から出土した後期の土器が比較的まとまった資料であった。しかし、昭和60～61年にかけて発掘調査された員弁町の奥田・大谷遺跡（16）では竪穴住居や土器、蛤刃石斧が確認され、さらに、平成７～８年の宮山遺跡の発掘調査において、竪穴住居・掘立柱建物の遺構が検出され、土器・石器などの遺物が出土した。特に宮山遺跡は、隣接する青川流域のから採取した石材を使って磨製石斧を製作していたことを示す磨製石斧の未完成品及び完成品、敲打具・台石・砥石などの工具類、そして製作段階に生じたと見られる剥離片などが出土し、「石斧の里」として注目を集めた。隣接する大久保城跡[6]（6）においても石斧が出土しているが、宮山遺跡との関係が深いものと思われる。その他青川沿いの奥村遺跡・中山遺跡、阿下喜周辺の川向遺跡・見性寺境内遺跡・見性寺下遺跡・正邸遺跡（以上北勢町）、宇賀川沿いの下小原遺跡・照光寺遺跡・野々田遺跡（以上大安町）などで少量ではあるが遺物が出土している。

古墳時代になると、古墳の分布している地域を、北勢町阿下喜周辺・山田川流域・戸上川流域・宇賀川流域の４つに分けることができる。

北勢町阿下喜の大西神社古墳群（17）は、現在の大西神社の敷地内に所在し、現在では１号墳および２号墳のみがかろうじて墳丘の高まりを残している。昭和４年頃の道路改修工事により、横穴式石室が露呈し、鉄刀や玉類、須恵器などが出土している。その他鳥坂古墳（18）・町割古墳（19）・別当古墳（20）・堂の上古墳群（21）などが阿下喜周辺に点在している。

山田川流域には北勢町の麻績塚古墳群（22）がある。全長43mの前方後方墳の１号墳を中心としていくつかの古墳があったと思われるが、周辺の開発が進んでいるため、現状では２基のみしか確認することはできない。時期的には前期のものと想定されているが、未調査なため詳細は不明である。山田川流域にはこの他に二子塚古墳・其ノ原南古墳（23）・北野中古墳群（24）などがある。

戸上川流域には員弁町に岡古墳群（25）と呼ばれる３基からなる古墳群がある。このうち３号墳は横穴式石室を持つ円墳であり、片袖式の狭長な羨道を持つ。戸上川流域には他に町名古墳・平子古墳群・鳥取塚古墳群・福塚古墳・黄金塚古墳・築山古墳・猪名部神社古墳・西畑古墳など、多くの古墳が存在する。前方後円墳としては、岡１号墳・猪名部神社１号墳・西畑古墳が知られている。

宇賀川流域では、大安町に下小原古墳群[7]（26）と呼ばれる18基以上からなる小円墳群が存在する。一部が発掘調査され、横穴式石室を主体部とする７世紀前半頃の群集墳と考えられる。下小原古墳群が所在する宇賀川沿いには、南林古墳群、上小原古墳群、宇賀新田古墳群（27）など、十数基程度を単位とする小古墳群が点在する。

古墳時代の集落遺跡については、北勢町の上惣作遺跡[8]（１）で竪穴住居や掘立柱建物がみつかっているが、周辺では他に同時代の明確な遺構が少なく、その実体はまだ不明な点が多い。上惣作遺跡は大西神社古墳の西に位置しているため、その関係も注目される点である。

奈良・平安時代になると、当郡内においても、かなりの発掘調査例をあげることができる。員弁町の奥田・大谷遺跡では奈良時代を中心とする40基をこす竪穴住居が検出されているほか、東員町の山田遺跡・村前遺跡では、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。これらの遺跡からは、かなりの量の遺物が出土している。また多くの古墳が所在する戸上川流域に集まっているという点でも興味深い。特に、山田遺跡・村前遺跡は、円面鏡や緑釉陶器などが出土しており、また山田廃寺や式内猪名部神社との地理的関係からも、この東員町山田を中心とする一帯は、かなりの拠点的集落の想定が可能であろう。員弁町の段遺跡[9]（28）でも、平安時代の集落跡が報

告されている。

中世の遺跡としては多くの城跡の存在が知られる。発掘調査されたものに目を向けると、東員町では城山に所在する山田城[10]がある。すでに、土取りによって消滅した部分があったものの、ほぼ全体の調査が行われたことは、員弁郡内では希な例である。北勢町の田辺城の隣接地[11]も調査されているが、中世城跡に関わる遺構・遺物の出土はなかった。大安町では、丹生川上城[12]（29）で中世寺院跡・中世墓などが報告されている。郡内の中世城館としては藤原町の山口城・野尻城、北勢町の中津原城・上木城（30）・治田城（31）、大安町の大井田城（32）・梅戸城（33）、員弁町の金井城（34）・上笠田城（35）、東員町の中上城・大木城（36）・長深城（37）などで部分的であるが、堀や土塁などを残している。また、大安町では城跡以外にも、大安町経塚中世墓群（38）の調査が行われており、多くの蔵骨器が出土している。

中世以降の集落跡は、現代の集落に重なっているところも多いためか、調査例に乏しい。今後、近世遺跡も含めて資料の充実が期待されるところである。

（今尾）

3　東村城跡の立地と周辺の状況

東村城跡（3）は、三重県員弁郡北勢町東村に所在する。員弁郡の中心部を、近江と美濃の境となる三国岳（標高815 m）に源を発する員弁川が、支流と合わさりつつ北西から南東に流れる。この員弁川の上流域の右岸に東村の集落をのせる段丘がある。その段丘の北端に突出した通称「権現山」と呼ばれる細い尾根部に東村城跡が立地する。東村城跡の調査前の標高は103.4mで周囲との標高差はおよそ15.3mほどある。東村城跡の眼下には員弁川の両岸に平野が広がる。員弁川流域の標高はおよそ75m～80mである。

東村とは旧治田村の七つある大字の一つである。この治田村は、「神鳳鈔」に「治田御厨」とあり中世は神宮領であったと考えられる。中世末は織田信雄領で治田郷と呼ばれた。江戸時代初めには近隣の村が桑名領であったのに対し、幕府領であった。元和元年、家康の孫娘千姫の桑名藩へ輿入れに際して化粧料として桑名領となり、本多氏の国替えに伴い、姫路領となった。その後一時幕府領に復した後、上総一宮領と所領が変わった。

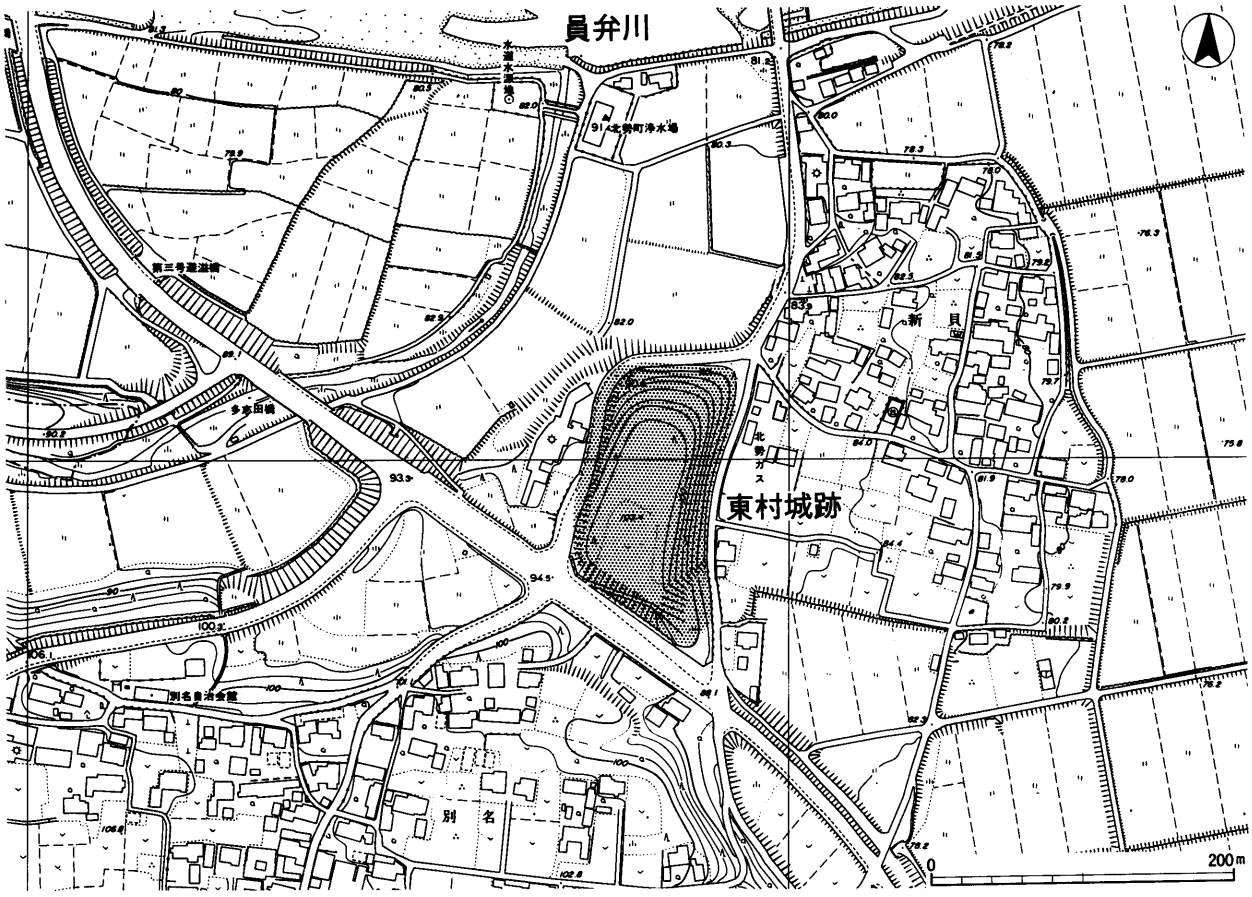
東村城は、少なくとも天正年間には存在したと思われる。その頃の北勢地方は、いはゆる北勢四十八家と呼ばれる国人・土豪層が群雄割拠していたと言われ、そのうち員弁郡には、上木氏、白瀬氏、高松氏をはじめ十三家があったとされる。しかし、員弁郡内で現在確認されている中世城館だけでもその数をはるかに上まわり、詳細が不明であるのも含めると38を数える。現時点において規模を確認できるのは24ほどである。このうち発掘調査によって規模及び時期を示す資料が明らかにされたのは、わずかに3つの城館である。

員弁郡内の中世城館の多くは員弁川を眼下に望む段丘上に位置している。員弁川の水運や員弁川流域の低位段丘は、交通の要衝であり、物資や商品の運搬はもとより、兵の移動にも重要な役割を果たしていたと考えられる。本調査区も眼下に員弁川の河岸平野を眼下に見下ろせる、恵まれた条件を備えている。

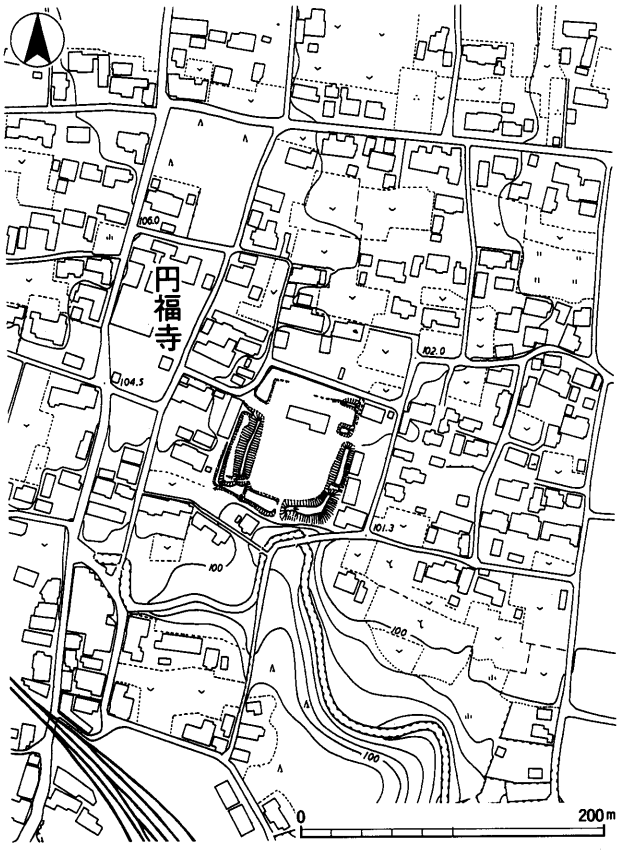
中近世においてはもちろん、近代でも、桑名に集められた荷が船で員弁川をさかのぼり、金井城あたりから六石、上木（阿下喜）にかけて降ろされ、峠越えにより近江の国に運ばれたという。東村を含む治田村は、員弁川の荷揚げでにぎわった上木（阿下喜）と山越え商人の行き交う治田峠を結ぶルート上にあり、重要な役割を果たした地と思われる。

東村城跡の周辺の中世城館には、藤原町の玉垣内城跡・白瀬城跡・西野尻城跡・東禅寺城跡、北勢町の上木城跡（30）・治田城跡（31）、大安町の丹生川上城跡（29）・大井田城跡（32）、員弁町の金井城跡（34）、東員町の中上城跡などがある。今では詳細は不明であるが、文献にみられるものには藤原町の石川城（39）や北勢町の中山城（40）・麻生田城（41）および大安町の野田丸城（42）も東村城の近隣の城館としてあげておきたい。

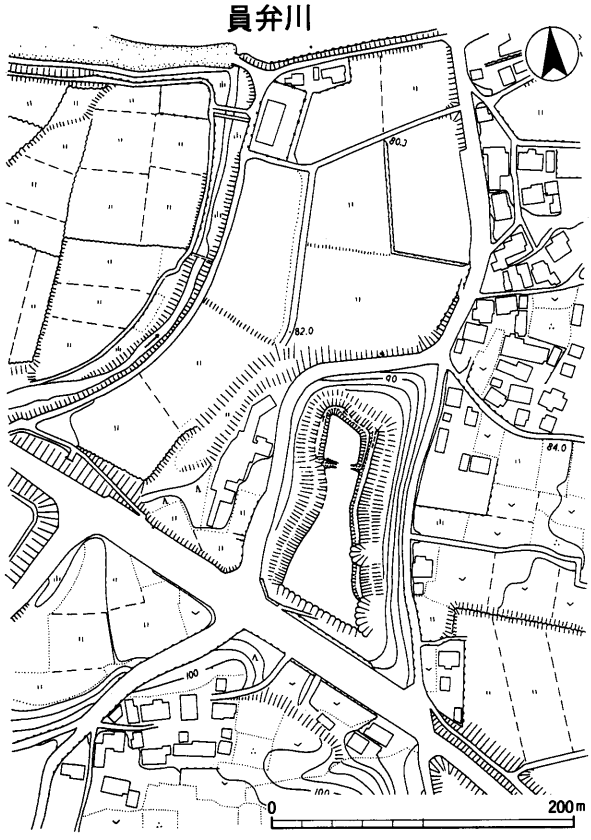
員弁郡内の発掘調査された中世城館の事例には、員弁川の流域からは若干北に離れるが、東員町城山に所在する山田城跡がある。土取りにより消滅した部分があったものの、ほぼ城全体の調査が行われたことは、員弁郡はいうに及ばず、県下でも数少ない



第４図　遺跡周辺地形図（１：5,000）



第５図　楠の下荘跡縄張図（１：5,000）

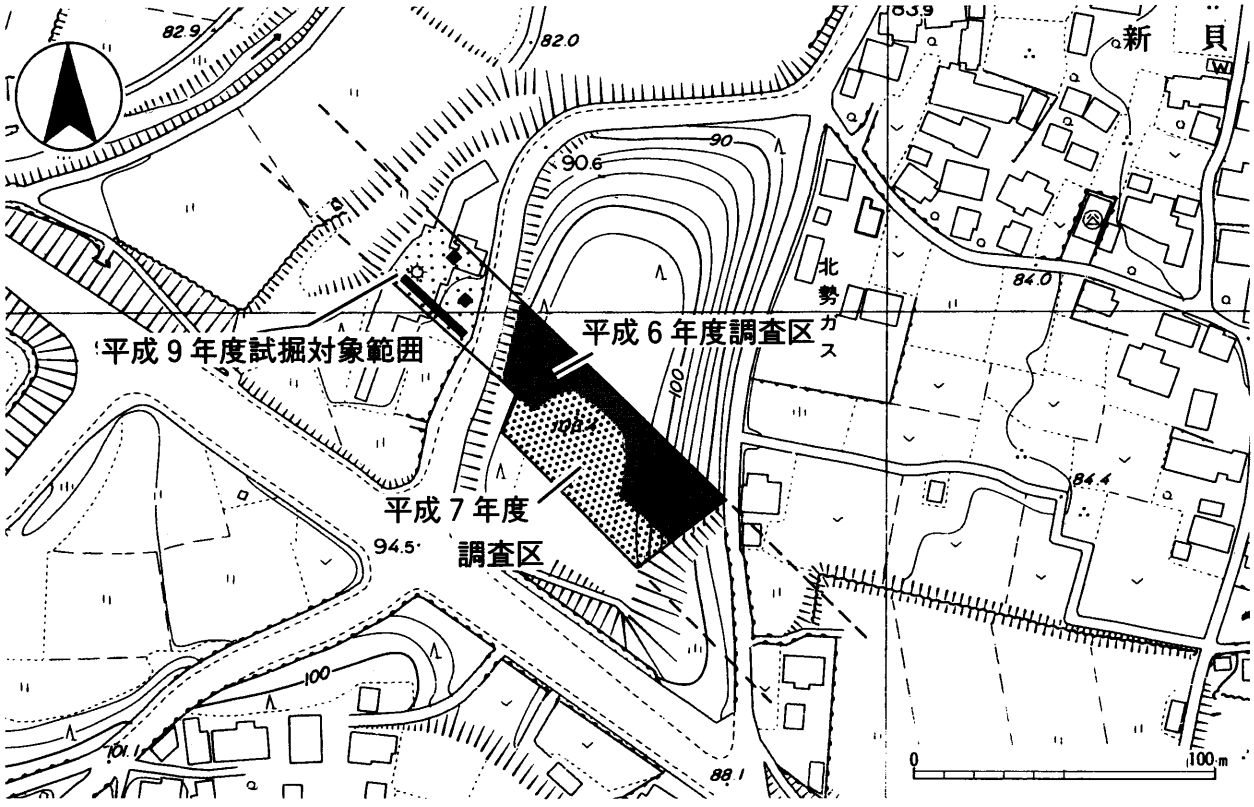


第６図　東村城縄張図（１：5,000）

例で、貴重な資料を提供している。北勢町の田辺城の隣接地も調査されているが、中世城跡に関わる遺構・遺物の出土はなかった。藤原町の白瀬城跡は一部が調査され瀬戸、美濃を中心とした中世陶器が出土している。また大安町の丹生川上城の一部も発掘調査が行われており、中世寺院跡・中世墓などが併せて報告されている。

城館跡以外の中世の遺跡には、藤原町の東禅寺廃寺および東禅寺中世墓、大安町の経塚中世墓群 (38) などがある。東禅寺廃寺および東禅寺中世墓からは経筒をはじめ古瀬戸や常滑焼などの蔵骨器が出土している。経塚中世墓群については発掘調査が行われ、多くの遺構と蔵骨器が確認されている。ほかにも、賀毛神社の別当寺とされる魏竹山興正廃寺跡（43）があり、宝篋印塔が今に残る。これらの寺院跡や中世墓の立地からみると、集落の背後の山中に信仰の場を求めた例が多いと考えられる。現存の聖宝寺（藤原町）や杉谷中世墓（三重郡菰野町）なども、ともに中世の精神的な伝統を今によく残す例であるといえる。

また、治田峠の麓にある新町谷には治田鉱山があった。慶長年間頃に始まり、元禄～寛保年間を最盛期に近代まで銀や銅の産出があり、大勢の人々が峠を往来したという。（清水）



第７図　調査区位置図（１：2,500）

（註）

① 松本覚ほか『川向遺跡発掘調査報告』北勢町教育委員会　1993 年
② 陰山誠一『北野遺跡第２次発掘調査報告』員弁町教育委員会　1994 年
③ 山田　猛　『山田遺跡発掘調査報告』東員町教育委員会　1991 年
④ 竹内英昭ほか『宮山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999 年
⑤ 清水弘之・杉﨑淳子「覚正垣内遺跡」『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅴ　三重県埋蔵文化財センター　1997・1999 年
⑥ 片岡　博「大久保城跡」『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ　三重県埋蔵文化財センター　1997 年
⑦ 松本　覚・久志本鉄也『下小原古墳群発掘調査報告』大安町教育委員会　1993 年

⑧　小菅文裕・清水弘之・竹内英昭・杉﨑淳子・片岡　博「上惣作遺跡」『一般国道 475 号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅱ～Ⅳ　三重県埋蔵文化財センター　1996～1998 年
⑨　陰山誠一『段遺跡発掘調査報告』員弁町教育委員会　1994 年
⑩　松本　覚・久志本鉄也『山田城跡発掘調査報告』東員町教育委員会　1984 年
⑪　田中欣治・松本　覚『北勢町田辺城址隣接地遺跡発掘調査概要』北勢町教育委員会　1980 年
⑫　杉谷政樹・久志本鉄也『丹生川上城跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1985 年

この他下記の文献を参考とした

・大安町史編纂委員会『大安町史』大安町教育委員会　1986 年
・員弁町町史編纂委員会『員弁町史』員弁町教育委員会　1991 年
・東員町史編さん委員会『東員町史　上巻』東員町教育委員会　1989 年
・三重県教育委員会編『三重の中世城館』三重県教育委員会　1977 年
・近藤　杢『治田村誌』治田村公民館　1953 年
・藤原町町史編纂委員会『藤原町史』藤原町　1992年
・伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現状」『研究紀要　第 6 号』三重県埋蔵文化財センター　1997 年
・川瀬　進「二．地質・地形」『北勢町風土記』北勢町教育委員会　1978 年

Ⅲ　調査の成果

1　基本層序

基本層序は、大きく３層に分層でき、第Ⅰ層：表土（腐葉土・耕作土）、第Ⅱ層：暗褐色土、第Ⅲ層：明褐色土（地山）である。

試掘調査の結果をもとに、表土直下の第Ⅱ層上面で検出することが適当と判断し、調査を進めたが、畑の耕作により、想像以上に深くまで人の手が入っており、耕作溝をはじめ攪乱が多く遺構の検出ははかどらなかった。また、第Ⅱ層上面においても古い時代の遺物の包含を確認したため、第Ⅲ層を最終検出面として調査を進めた。

後述する奈良時代の遺構は第Ⅱ層上面で検出できたものだが、その他のピットや土坑といった遺構の大半は第Ⅲ層で検出できたものである。

なお、遺構に伴わない遺物（大半が弥生土器である）は、第Ⅰ層掘削時および第Ⅱ層掘削時の出土であり、第Ⅱ層を包含層、第Ⅲ層を検出面と捉えることも可能であるが、本来的には、第Ⅱ層上面が検出面で、明確な包含層はないと捉えるべき状況である。こうした状況を踏まえた上で、本報告書では便宜上遺構に伴わない遺物を「包含層」出土遺物として一括して取り扱うことにした。

2　遺構と遺物

（１）概要

２カ年にわたる本調査によって、確認できた遺構には大小様々の土坑やピットそして溝がある。しかし、これらの遺構のうち数基を除くほとんどは遺物の出土が無く、遺構の形態からもその性格や時期を明らかにできないものである。したがって、以下には奈良時代と中世の遺構として認識可能と思われるものを中心にあげることにする。

調査の結果からは城館としての特徴を積極的に見い出すことは難しく、次にあげる特徴についても近世以降の耕作等に関するものである可能性は充分に検討すべき課題を残すものである。

調査区の上部平坦面を取り囲むような溝（ＳＤ11・13・14）は、細長く北に延びる丘陵の上面を四角く囲むことによって、方形の平坦面を形成している。また、東斜面に残る土塁状の高まりや東斜面の途中にある幅３ｍほどの帯状のテラス部分とそれに平行する溝（ＳＤ12）は調査区外の北にまで延びており、城に伴う遺構である可能性を残していると思われる。

（２）奈良時代

隅丸方形土坑（ＳＫ１）

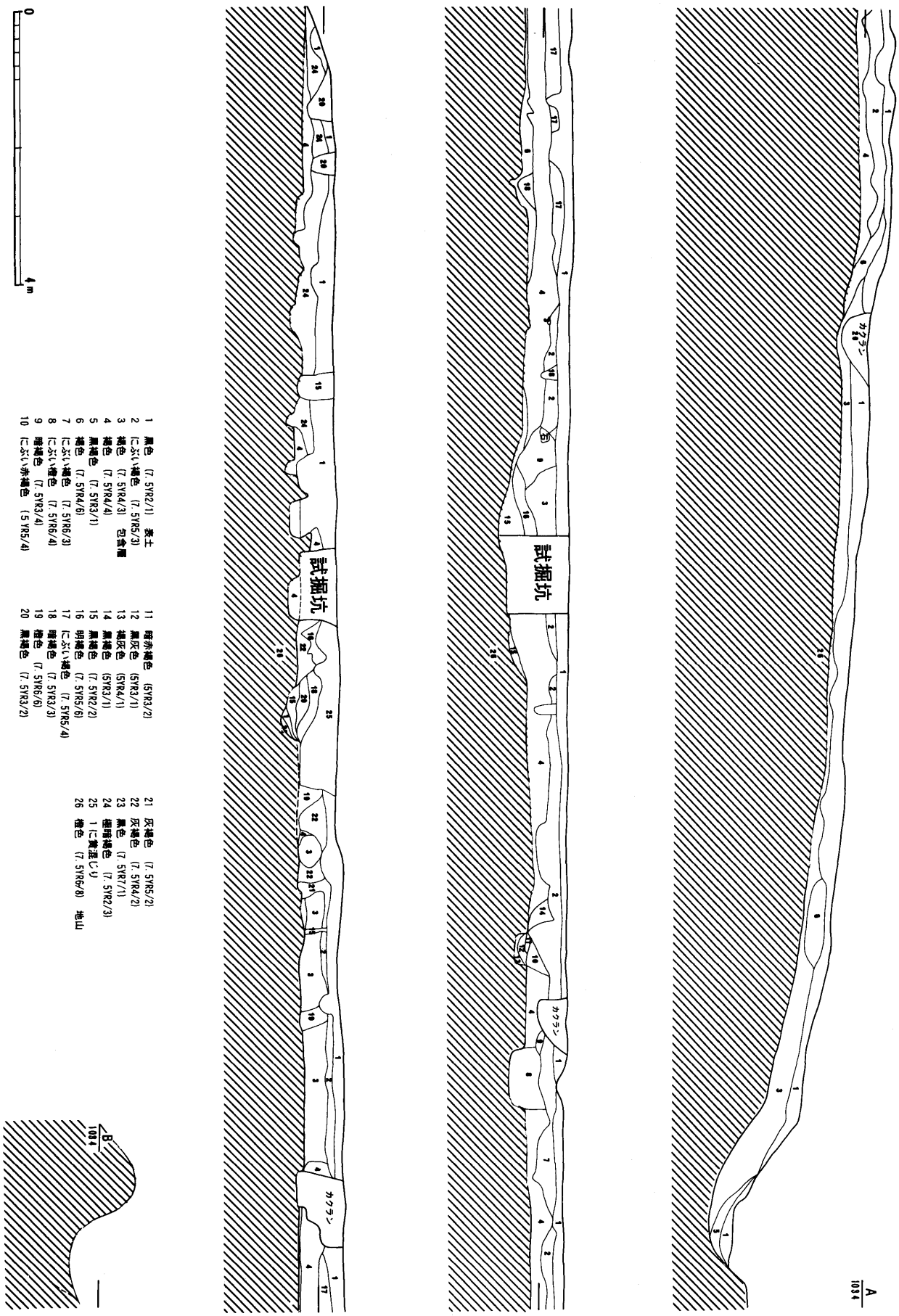
遺構の状況　調査区中央にある平坦面の東端に位置する。東西約 2.3m、南北約 1.9mでやや不定形の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは最も深いところで 15cm を計る。土坑の床面は平坦ではなく複雑な起伏が見られ、検出の段階では確認できなかったが、複数の土坑が重なっている可能性は否定できない。土坑の南東の隅には、床面の一部から土坑の周囲約 50cm にかけて焼土が認められた。また、埋土にも場所によって量の多少はあるものの、焼土や比較的多くの炭が含まれていた。また、土坑内に数個の拳大から人頭大の石が検出できた。さらに、土坑の東側も２～３の被熱した人頭大の石が確認できた。いずれも意識的に置かれたとは思えない。

また、土坑の埋土についてはフルイ掛けを行ったが、炭化物片のほかには水瓶の体部表面が剥離した破片が僅かに確認できたにとどまった。

出土遺物　須恵器には杯身（１）と横瓶（２）、水瓶（３）、長頸瓶（４）、台付長頸瓶（５）がある。横瓶以外の瓶類はみな頸部から口縁部にかけては出土しなかった。土師器は甕（６）が一点のみ出土している。これらの遺物は おおむね８世紀代のものと思われる。

杯身（１）　口縁部が逆ハの字に直線的に延びる。底部は平坦で高台は付かない。底部外面はヘラオコシ後にヘラケズリ調整を施す。

横瓶（２）　出土した須恵器の内では最も残りがよく、ほぼ完形である。横側を粘土の円盤で塞いだ俵型の体部のほぼ中央に口頸部を貼付けた一般的な造の横瓶であるが、口頸部に段を持たないもので、８世紀中頃のものと思われる。体部外面は、平行タ



第８図　調査区南西壁土層断面図（１：80）

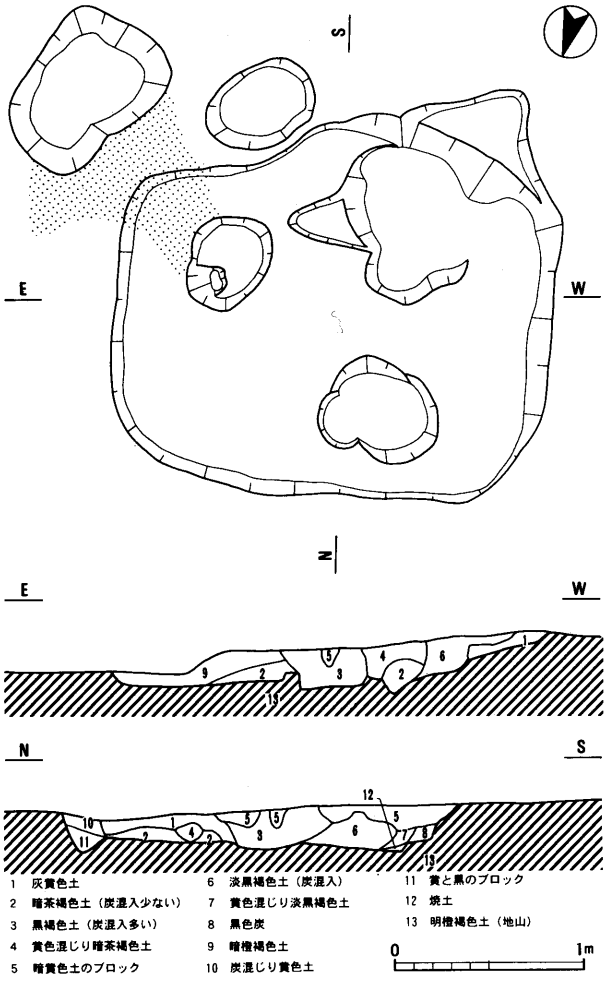
第９図　遺構配置図（１：200）

タキを施した後ナデケシしている。また、体部外面には部分的に剥離が見られる。

水瓶（3）　細く締まった口頸部と球形の体部を三段接合により貼り合わせている。体部外面はほとんど全面にわたって表面が剥離している。それは、頸部の接合のために補充した比較的柔らかい粘土を表面に薄く延ばしているために、表面が剥離したとも考えられるが、意識的に剥離を重ねたと思われるほど、細かく全面にわたって欠損している。残存部から推定するに、器種についてはあるいは浄瓶である可能性も考えられる。8世紀代のものである。

長頸瓶（4）　三段接合による口頸部は体部との接合面から欠損する。体部は最大径を上位に持つ球体である。やや厚めの底部にはわずかに開いた断面台形の高台を貼りつける。体部外面中位から底部にかけては回転ヘラケズリ、他は内外面とも回転ナデ調整を施している。8世紀半ばのものである。

台付長頸瓶（5）　体部は球形に持ち、



第10図　SK1平面図・土層断面図（1：40）

肩が張る。肩部付近には二条の沈線が巡る。底部端にはハの字に開く内面接地の高台を貼りつける。底部外面にはヘラによる爪状圧痕が見られる。高台の外端面には径8㎜内外の欠損がほぼ全周にわたってみられ、意識的に打ち欠いたように思われる。8世紀代のものである。

土師器甕（6）　体部は球形であり、底部は欠損しているがおそらく丸底であると思われる。口径は体部最大径よりわずかに大きく16.6 cm を計る。口頸部から口縁部は外上方に強く屈曲し、口縁端部は強いヨコナデにより凹面を持つ。体部外面の上位には縦位のハケメが、下位にはヘラケズリが施されている。内面は全面に比較的細かいハケメが斜め方向に施される。須恵器と同じく8世紀代のものと思われる。

（3）鎌倉時代

中世墓（SX2）

遺構の状況　調査区の南端に位置する。第一検出面での検出ではあるが、遺構の残りが悪く遺構の深さは検出面から僅か10cm前後である。検出時の規模は、長軸2.3m、短軸0.4～1.0mの不定形な三角形状を呈していた。しかし、刀子（8）の出土状況からしても、遺構の平面プランは本来的にはもう少し東に張出し、ひと回り大きいものであったと思われる。

形状や出土遺物の状況からSX2は中世墓と考えられ、時期はおそらく13世紀頃であろうと思われる。

出土遺物　山茶椀が1個と鉄製の刀子が2口である。

山茶椀（7）　口径、底径に対して器高は低めで、体部はやや直線的な形を呈する。底部にはややつぶれた楕円形の籾殻痕の付着した高台が付く。尾張系のものと思われ、藤澤良祐氏の山茶椀編年で5～6形式に相当し12世紀末から13世紀にかけてのものである。

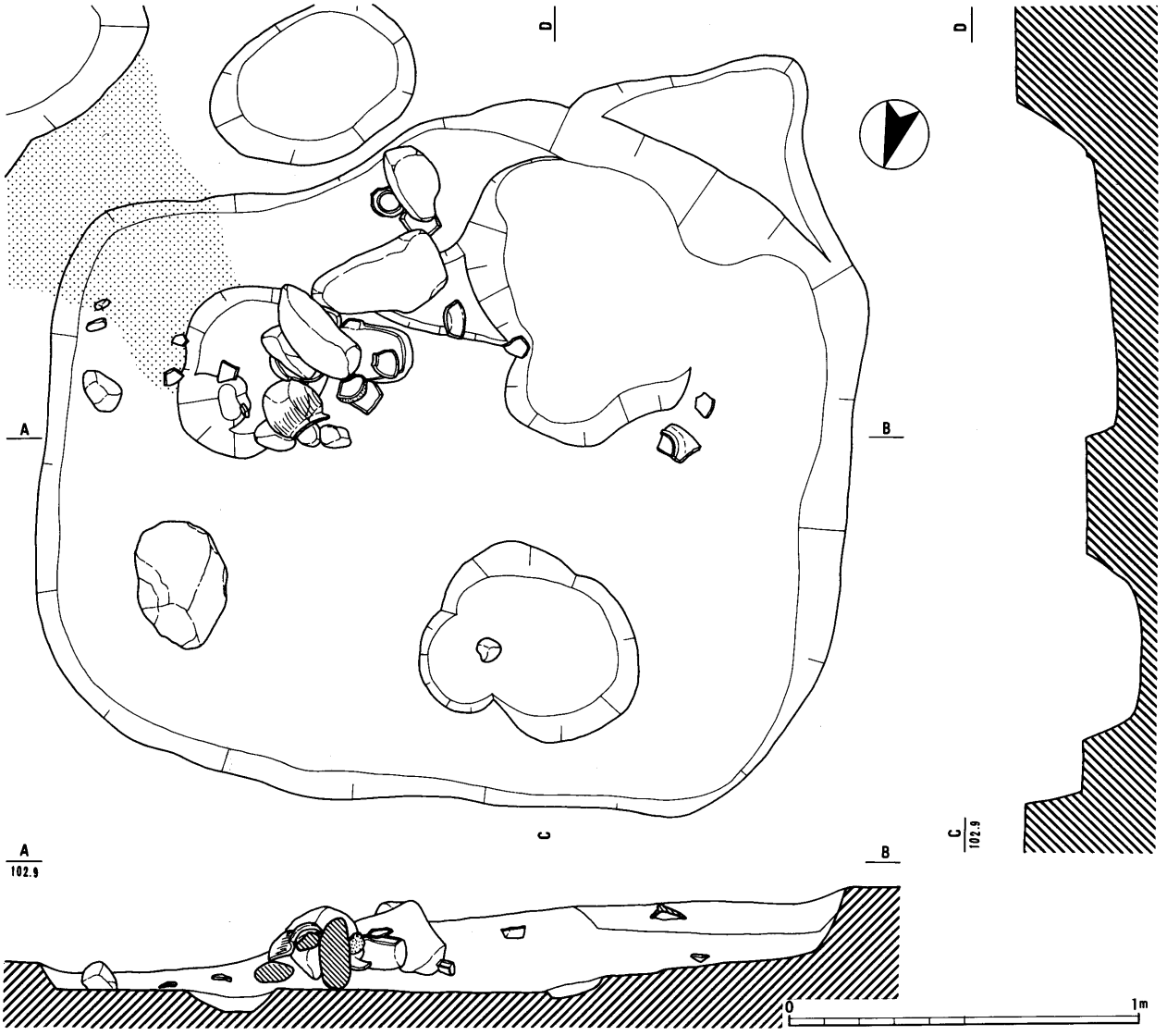
刀子（8・9）　8はほぼ完形で全長32.1cm、最大幅1.5cmを測る。部分的ではあるが木質部の残存が良好で、柄あるいは鞘の丸く加工された形状が確認できる。目釘穴は茎部のほぼ中心に1つあり、関部はX線写真による観察の結果、両関であることが判明した。目釘に使用しているのは竹材と思われる。

9は茎部のみの残存である。残存長8.4cm をはか

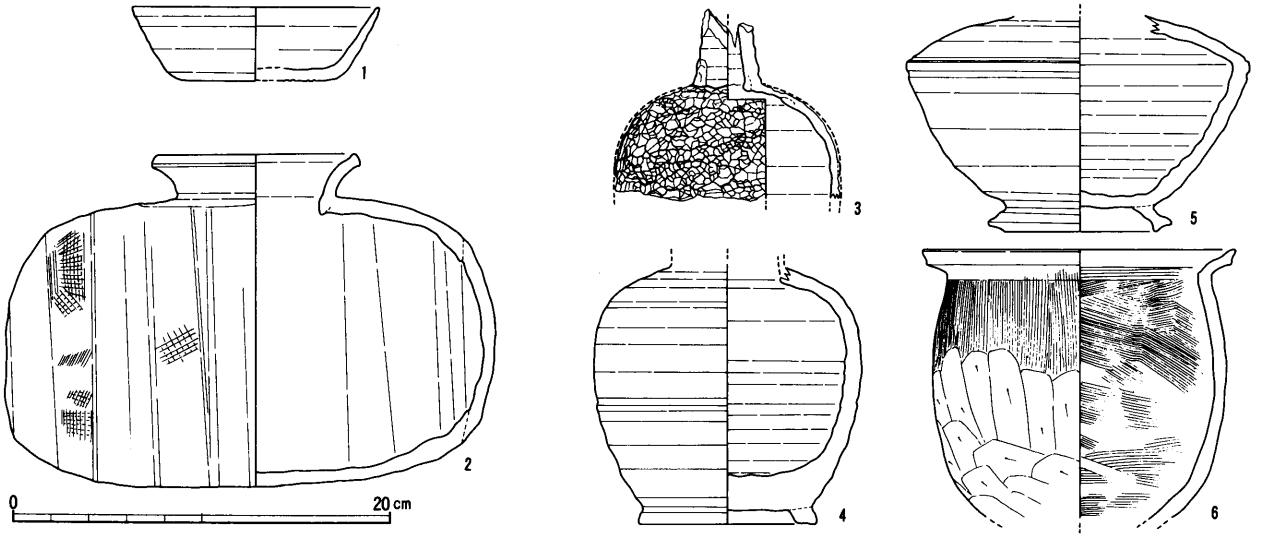
り、X線写真による観察の結果目釘が1つ確認できた。背関は無く片関であると思われる。

（4）時期不明の遺構

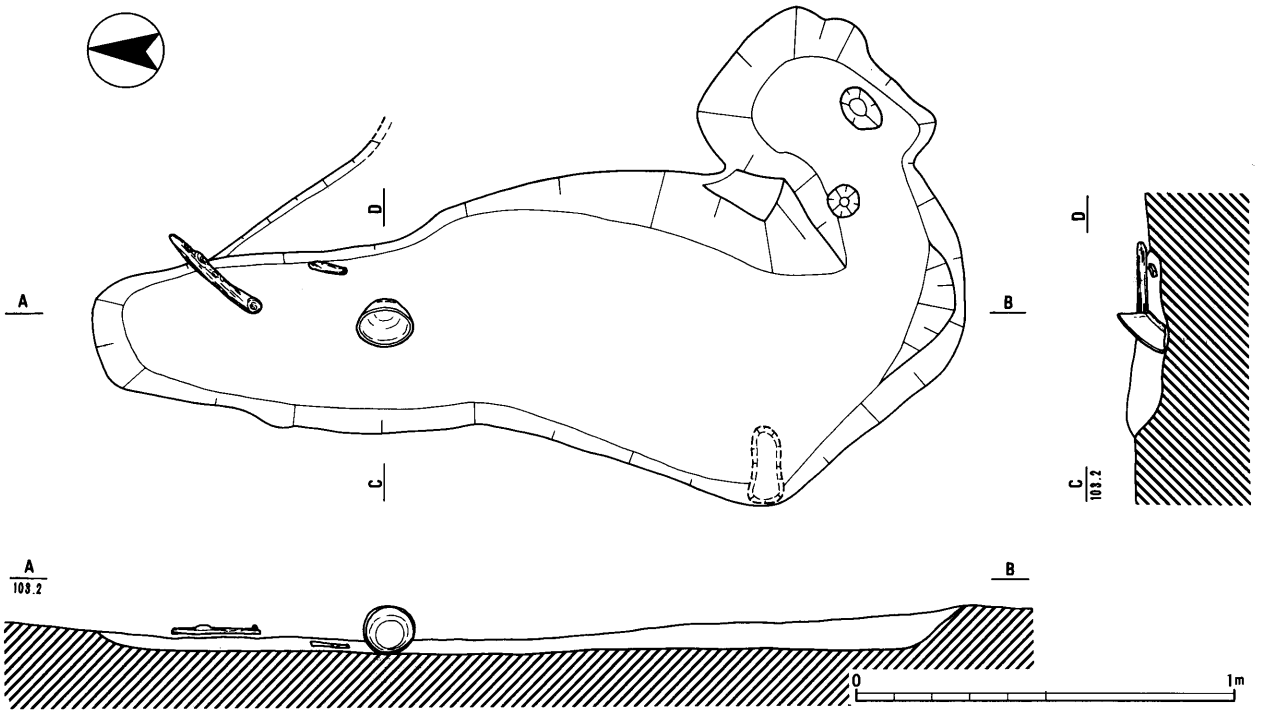
a溝



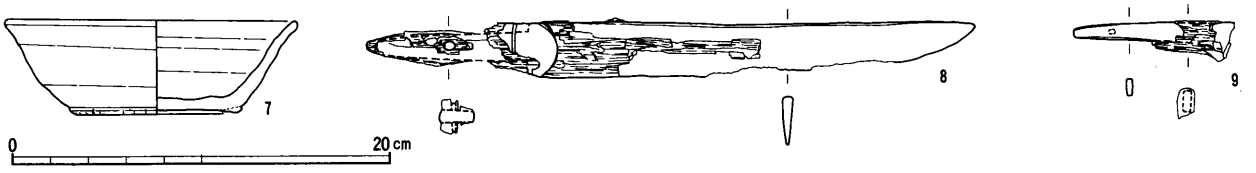
第11図　SK1遺物出土状況図・断面図（1：20）



第12図　SK1出土遺物実測図（1：4）



第13図　SX２平面図・断面図（１：40）



第14図　SX２出土遺物実測図（１：４）

南北に細長くのびる尾根上にあるが、この尾根に平行及び直交する大小の溝が確認できた。これらの溝は尾根上の平坦面を四角く囲むように、東西方向と南北方向に走るものであるが、この方形の区画及び溝が中世城館に伴うものであるのかは不明である。

ＳＤ11　調査区の上部平坦面のすぐ東に位置する溝で、尾根と平行に南北方向にのびる。上幅は 2.3 ～ 2.7 m、下幅は 0.4 ～ 0.6 mで深さは 73 cm 前後である。

ＳＤ12　調査区の東斜面の途中にある。等高線に平行する南北方向の溝である。上幅 1.8 ～ 1.6 m、深さ 15 ～ 20 cm。底の傾斜はやや北に傾くがほぼ水平といえる。溝というにはわずかに窪むだけであり、犬走り的な役割を持った北方の尾根の先端に抜ける通路であった可能性もある。

ＳＤ13　調査区の上部平坦面を環るように、東西方向にのび、次いで南北方向にのびる溝である。上幅は2.3 ～ 2.7 m、下幅は0.4 ～ 0.6 mで深さは 73 cm 前後である。

ＳＤ14　調査区の西に南北方向にのびる溝である。幅は上幅 0.6 m、下幅 0.3 m、深さ 20 cm。底の傾斜は北へ下がる。ＳＡ10 のすぐ内側であり、おそらくは耕作に伴う根切りのためものではないかと思われる。

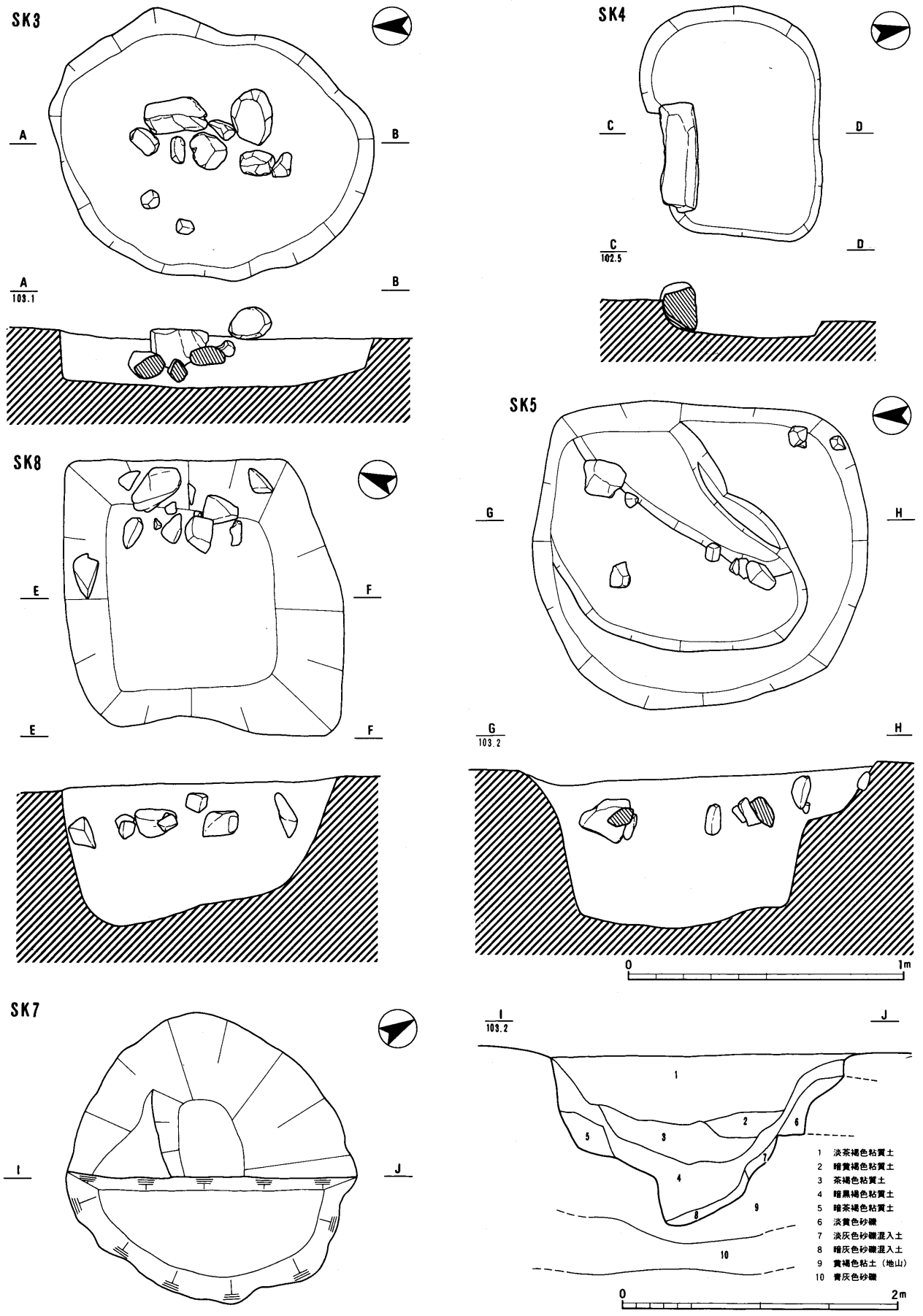
ＳＤ15　調査区の東斜面を西から東に下る溝で、幅は上幅 1 ～ 2.5 m、下幅 0.4 ～ 0.5 mである。深さは 30 cmで、東斜面とほぼ同じで急勾配である。中世城館に伴う竪堀とは言い難い。

ｂテラス状遺構

東斜面では、上部平坦面から 2 mほど下がったところに、幅 3 mほどのテラス部分が帯状に巡っている。そしてこのテラス部の西側でＳＤ12 が検出された。出土遺物もなく、時期は不明である。

ｃ土塁

ＳＡ９　調査区平坦面から東に斜面をわずか下がったところに、南北方向に約 35 m続くわずかな高まりである。調査前は特に明瞭ではなく、掘り上がり後の高さは調査区の平坦面とほぼ同じであるが、



第15図　SK３～５・８平面図・断面図、SK７平面図・土層断面図（１：40）

ＳＤ11・12によって明瞭となり、ＳＤ11とのレベル差は70～80cmとなる。幅は上で約１ｍ、下で1.5mである。検出した限りではＳＡ９は地山によってできており、構築に関しては平行するＳＤ11・ＳＤ12を掘削することにより、形成されたものと思われる。

ＳＡ10　調査区平坦面の西端に南北方向に約12m続くもので、さらに南の調査区外でも平坦面の肩部に沿って認められる。この高まりのすぐ内側にＳＤ14があり、根切りなど畑の開墾及び耕作に伴う可能性も高いと思われる。

ｄ土坑

ＳＫ３　ＳＸ２の近くで検出された。ほぼ円形で、南北1.15m、東西0.95m深さ20cmである。埋土中に拳大程の石が含まれていたり、法面が比較的まっすぐ落ちているところから、人工的なものであると判断する。遺物の出土はないが、中世墓の可能性もあると考える。

ＳＫ４　第Ⅱ層で検出した遺構である。長辺0.85m、短辺0.6m、深さ10cm。比較的整った長方形をしており、南辺東部に長細い石が横たわっていた。遺物の出土はなかった。

ＳＫ５　一辺約1.2mの少し丸みを帯びた方形で、深さは55cmである。この土坑も埋土には床面から30cmほど浮いた状態で石を含む。ＳＫ８と規模が似ており、位置的にも近く、同時期のものとも考えられるが、出土遺物がなく性格などは不明である。

ＳＫ６　一辺1.2m～1.7mの矩形で、深さは10cmである。遺物片が少量出土したものの時期決定にはいたらず、また性格も不明である。

ＳＫ７　直径約2.1mのほぼ円形である。比較的明確に検出された。プランの形状から、井戸であることを想定して掘り下げたが、1.3mほど下がった所で、擂り鉢状に窪む状態で止まった。この丘陵上の調査区のさらに北には井戸跡と思われる窪地もあり、ＳＫ７は井戸として掘られ、途中で放棄されたものではないかと推察する。出土遺物もなく時期は不明である。

ＳＫ８　一辺約１ｍの方形で、深さは50cmである。埋土中に人頭大ほどの石を含んでいる。これらの石は土坑の床面からは30cmほど浮いていた。また、掘削時、肩部より弥生時代前期遠賀川系の土器（20）が出土しているが、この土坑に伴うものとは考えにくい。他には出土遺物は見られず、土坑の性格は不明である。　（清水）

（５）包含層・その他の出土遺物

表土および包含層出土の遺物を中心に、土坑あるいはピットから出土してはいるが、後世の流れ込みであると思われる遺物や、試掘調査時に出土した遺物を以下にあげる。

ａ石器（12～19）

定角式磨製石斧（14）、乳棒状磨製石斧（15）、石鏃（12）、楔形石器（13）、敲石（17・18）、凹石（19）、軽石（16）が出土した。石材は、石鏃（12）は黒曜石、楔形石器（13）は赤チャートである。石斧（14・15）は肉眼観察においは、大安町青川水系に産するハイアロクラスタイトとみられる。

これらの石器は以下にあげる縄文土器、あるいは弥生土器と同時期のものであると思われる。

ｂ縄文土器（10・11）

中期末の深鉢であろうか。矢羽状に引いたと思われる沈線を確認するにとどまる残存である。

（清水）

ｃ弥生土器（20～83）

ここにあげる弥生土器は、ほとんどが表土および包含層からの出土である。土坑やピットから出土したものもわずかに数片見られるが、弥生時代の遺構とは断定しがたく、後世の流れ込みと思われる。これらの弥生土器は時期的には前期～後期まであるが、中期のものがもっとも多い。器種は壺・甕・高坏である。

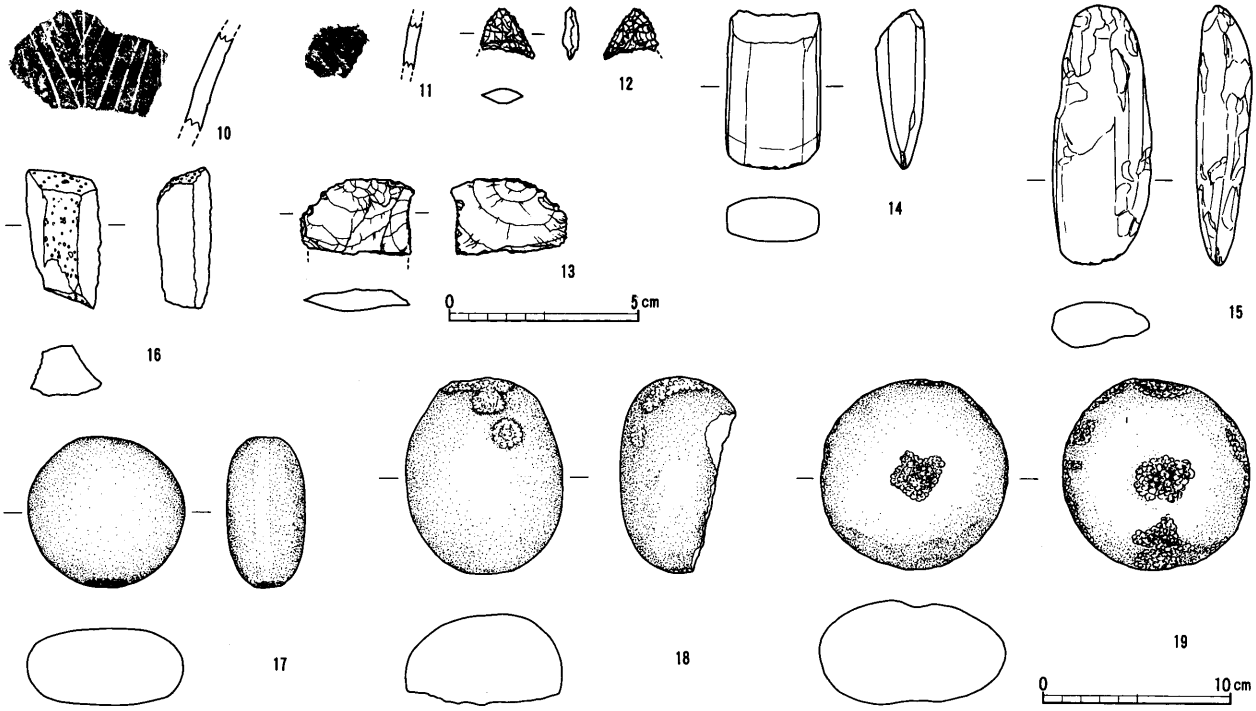
〔前期〕

壺口縁部（20）と壺底部（21）の２点が前期の土器である。２点ともいわゆる遠賀川式と思われる。口縁の内面と底部付近の外面は丁寧にヘラミガキがなされる。20の頸部には三条のヘラ描き沈線が横位に走る。

〔中期〕

22～62が中期の土器である。第Ⅱ様式～第Ⅳ様式の各様式がみられ、時期幅は広い。

22は山形口縁の甕で、ヘラによる刺突がみられる。24は細頸壺の体部であろう。２条の沈線の間はハケ、その上下はヘラミガキによる調整である。37～38は



第16図　包含層出土縄文土器・石製品実測図（1：4、12・13は1：2）

細頸壺の頸部である。38は二枚貝による刺突と縦方向の直線文が施される。

25は貼り付け突帯、26～28・36・44～48は櫛描直線文・波状文・擬似流水文が施され、尾張地方の貝田町式である。

30・32は口縁端面にキザミを施し、頸部には斜位の太いヘラ描沈線が施さる。三河地方の瓜郷式と思われる。29も頸部に斜位の沈線がみられるが口縁端面には凹線が施されキザミはみられない。

口縁端部に面をもつものには他に23・31・33・35・39・49・50・51・53・54・56・58～62などがある。31は広口壺で、口縁端面には円形浮文が付けられる。35は垂下した口縁を折り返している。23・39・49・56は甕の口縁で、39の端面には凹線とキザミ、23・49・56にはキザミがみられる。59の端面には凹線と貝殻の押圧、50と60には刺突がみられる。その他は、磨滅が激しく不明なもの（41・51・53）もあるが、口縁端面には凹線文が施される。58の内面には瘤状突起または円形浮文の痕跡がみられる。61の内面にはクシによる刺突、62の内面には刺突と扇状文が施される。

34・52・55・57は受口の壺（34・52・55）と甕（57）である。外面にクシまたは二枚貝による刺突が施される。55の口唇部には波状文がみられる。

43は高杯の脚部で、二条の凹線と二枚貝による刺突が施される。

〔後期〕

63～75が後期の土器である。

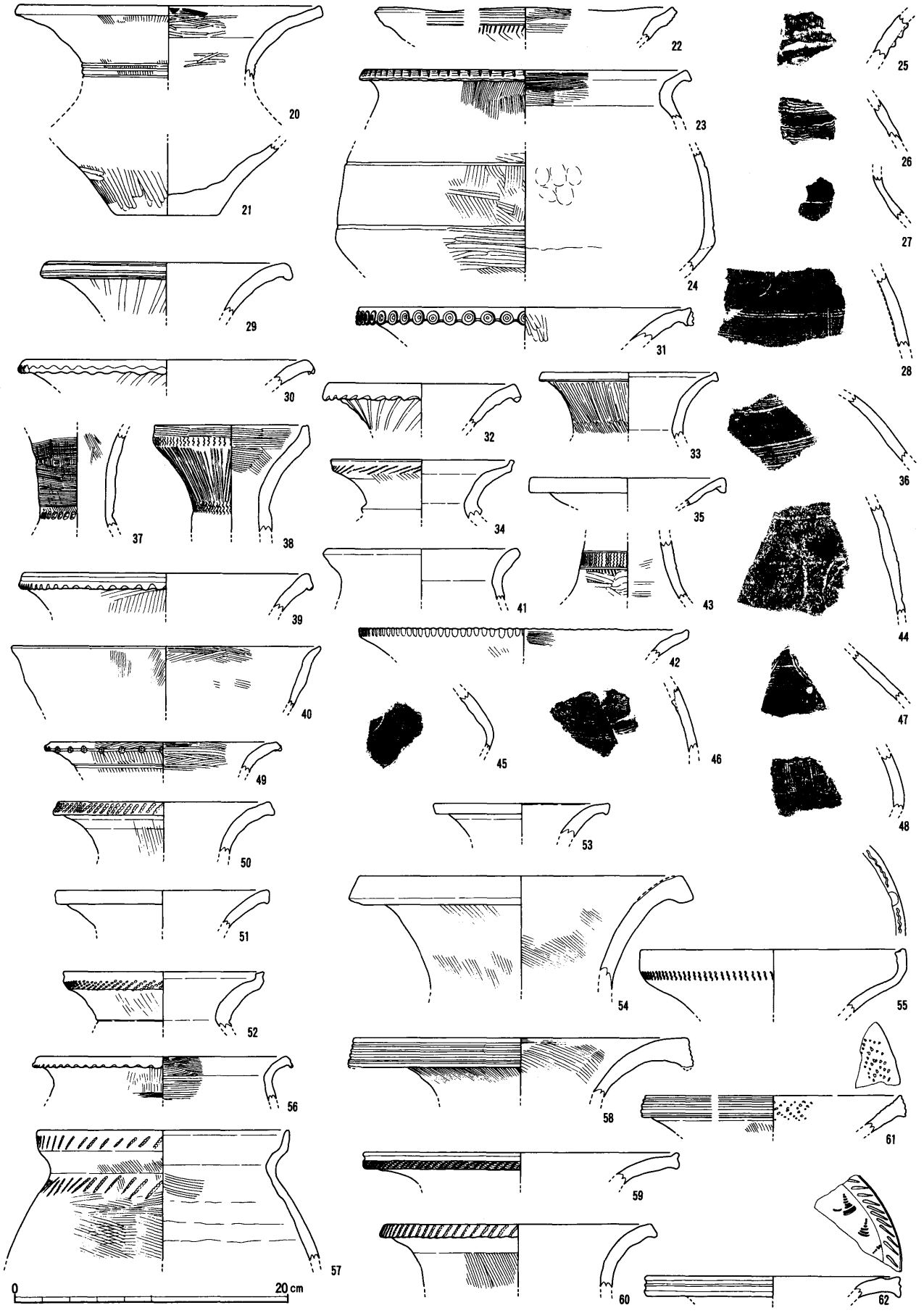
64と75は台付甕である。64は表面の磨滅が激しいが、外面はハケメ調整である。75は古墳時代に下る可能性もある。

65・66は受口の甕である。65は完形で、全体がハケメ調整される。口縁部は刺突文、胴部上半は2段の直線文と刺突文、中位は波状文によって飾られる。66は胴部の一部を欠くがほぼ全体の形が推定できる。全体がハケメ調整される。口縁部は直線文と刺突文、頸部は直線文、胴部は刺突文と波状文で飾られる。

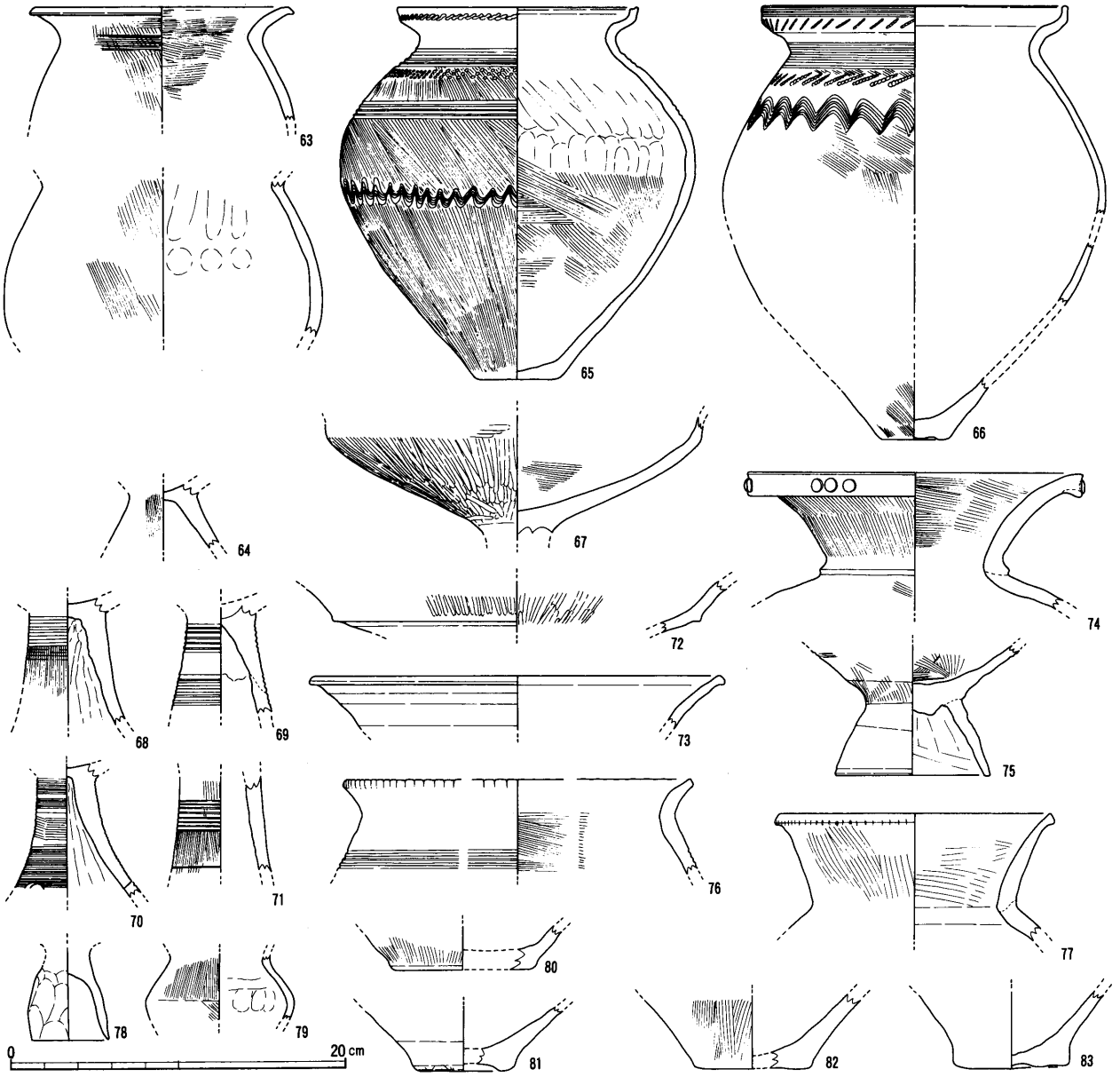
高杯（67～73）には後期でも古い様相を示すもの（67）もあるが、その他は山中期のものと思われる。67・72・73の杯部は丁寧なヘラミガキが施され、68～71の脚部外面に櫛描横線文が施される。70には円形の透かしが確認できる。

壺（74）も山中期のものである。外面に朱彩し、口縁端面に円形浮文を施したいわゆるパレススタイルの壺である。円形浮文は3個単位で6カ所にあったと思われる。

なお、76～83は時期不明の弥生土器である。76は口縁外面にキザミ、胴部に4条の沈線をもつ甕であ



第17図　包含層出土弥生土器実測図①（1：4）



第18図　包含層出土弥生土器実測図②（1：4）

る。内面は横方向のハケメによる調整である。77は壺で、口縁外面にキザミをもち、全体をハケメ調整する。78は小型の台付甕の台部、79は小型の壺である。80～83は壺または甕の底部である。磨滅の激しいものもあるが、ハケメ調整である。

（本堂・清水）

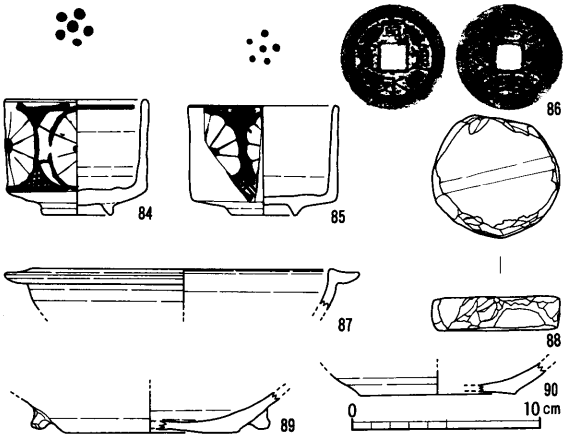
d近世の遺物

84・85は、美濃産の陶器筒形碗である。炻器質に硬く焼締まり、外面にはコバルト釉による菊花文が描かれる。

86は寛永通宝で、裏面に波文のあるものである。

87は、土鍋の口縁部、88は陶器の円形加工製品である。

89、90は行平の底部である。信楽産に比べ焼きは硬緻であり、瀬戸産であろうか。　（本堂）



第19図　包含層出土近世遺物実測図（1：4）

図版番号	登録番号	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	残存高	その他	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
01	021-02	須恵器 坏身	SK1		3.9		内外面:ロクロナデ 底部外面:糸切未調整	密	やや軟	外:にぶい黄橙色 10YR7/2 内:灰黄色 2.5Y7/2		
02	017-01	須恵器 横瓶	SK1	10.4	17.7		口頸部貼り付け後ロクロナデ 体部敲き後スリケシ 粘土円盤貼り付け後ナデ(両面)	密	並	外:灰白色 5GY8/1 内:灰色 N4/		
03	019-01	須恵器 壺	SK1		10.1		外面:頸部ロクロナデ 体部表面剥離 内面:ロクロナデ	やや密 長石 微細粒～1mm含む	並	外:黒褐色 10YR3/2 内:灰色 N4/		
04	021-03	須恵器 長頸瓶	SK1		13.6	底径 9.4	内外面:ロクロナデ 体部外面下部ヘラケズリ 底部:糸切後ナデ	密 長石 0.3～0.5mm粒含む	並	青灰 5PB6/1		
05	018-01	須恵器 台付長頸瓶	SK1		11.4	底径 8.2	内外面:ロクロナデ 底部外面:爪形押圧文	密	並	外:黄灰色 2.5Y5/1 内:灰色 5Y6/1		灰かぶり
06	020-01	土師器 甕	SK1	16.6			口縁部:ナデ 体部外面上部1/3タテハケ、下部ヘラケズリ 内面:ヨコハケ	並 長石 石英 砂 0.2～3mm粒含む	並	外:浅黄橙色 10YR8/4 内:にぶい黄橙色 10YR7/3	1/3	
07	021-01	山茶椀	SX2	15.6	5.4		外・内面:ロクロナデ 底部外面:糸切未調整	並 長石 石英 0.5～1mm粒含む	並	外:黄灰色 2.5Y7/2 内:浅黄色 2.5Y7/3	ほぼ完存	
08	022-01	刀子	SX2									木質部残存
09	035-02	刀子	SX2									
10	027-03	縄文土器 深鉢	包含層				外面:羽状沈線 内面:指オサエ、ナデ	やや並 長石 石英 小石 0.5～7mm粒含む	並	外:灰黄色 2.5Y7/4 内:浅黄色 2.5Y7/4	小片	
11	027-04	縄文土器 深鉢	包含層		2.4		外面:羽状沈線 内面:ユビオサエ、ナデ	やや粗 長石 石英 0.5～4mm粒含む	並	淡黄色 2.5Y8/3	小片	
12	035-01	石鏃	包含層					石材:黒曜石				凹基無茎鏃
13	007-01	楔形石器	包含層					石材:チャート				
14	011-03	磨製石斧	包含層									ハイアロクラスタイト?
15	012-02	磨製石斧	包含層									ハイアロクラスタイト?
16	038-01	(軽石)	包含層									自然石?
17	011-02	敲石	包含層	径 8.2	厚 4.0							
18	037-01	敲石	包含層	長径 10.4	短径 8.2						3/4	
19	036-01	敲石	表土	径 9.9	高 5.6						完存	
20	023-01	弥生土器	包含層	21.8	5.4		外面:ヨコナデ 頸部凹線 内面:ヘラミガキ	やや粗 長石 石英 0.5～2mm粒含む	並	外:浅黄色 2.5Y7／4 内:浅黄色 2.5Y7／3	口縁 1/8	
21	010-01	弥生土器 壺	包含層		5.3	底径 7.8	外面:ヘラミガキ 内面:表面剥離のため調整不明	粗 長石 1～5mm粒含む	やや軟	外:にぶい黄橙色 10YR7/4 内:明黄褐色 10YR7/6	底部完存	
22	034-02	弥生土器 甕	包含層	17.0	2.1		口縁外面:凹線 頸部羽状刺突文 内面:ヨコハケ	並 長石 石英 微細粒～1mm粒含む	並	外:橙色 5YR6/6 内:橙色 7.5YR6/6	口縁 1/14	
23	025-01	弥生土器 甕	包含層	24.2	3.5		口縁端面:凹線後、キザミ 外面:タテハケ 内面:ヨコハケ、ナデ	並 長石 石英 砂 0.5～2.5mm粒含む	並	外:浅黄橙色 10YR8/3 内:灰白 10YR8/2	口縁 1/13	
24	027-01	弥生土器 壺	包含層		8.7		外面:ヘラミガキ、ナナメハケ、凹線 内面:ヨコナデ	並 長石 石英 雲母 微細粒～2mm含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	体部 1/22	
25	002-06	弥生土器 壺	包含層				外面:貼付突帯	粗	良	外:にぶい赤褐色 5YR5/4 内:にぶい橙色 7.5YR6/4	小片	
26	002-05	弥生土器 壺	包含層				外面:櫛描波状文	粗 長石 1～2mm粒含む	並	外:にぶい褐色 7.5YR5/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	小片	
27	007-03	弥生土器 壺	包含層				外面:擬似流水文、ミガキ 内面:調整不明	長石 石英 0.5～2mm粒含む	並	にぶい黄褐色 10YR5/3	小片	
28	027-02	弥生土器 壺	包含層		5.3		外面:タテハケ、ヨコハケ 内面:ナデ	やや粗 長石 石英0.5～5mm粒含む	並	外:橙色 7.5YR7/6 内:褐灰色 10YR6/1	小片	
29	006-02	弥生土器 壺	包含層	19.0	3.9		口縁端面:キザミ 外面:ナナメ沈線	粗 長石 石英 0.4～1mm粒含む	良	外:にぶい黄褐色 10YR5/3 内:にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁 1/6	
30	008-03	弥生土器 壺	包含層	21.6	1.9		口縁端面:キザミ 外面:頸部ナナメ沈線 内面:ナデ	やや粗 長石 石英 0.5～2mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10Y6/4 内:にぶい黄褐色 10YR5/4	口縁 小片	
31	031-01	弥生土器 広口壺	包含層	24.0	2.5		円形浮文 口縁内面:縦方向ヘラミガキ	0.5～2mmの小石含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/4 内:にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁 1/12	
32	002-01	弥生土器 壺	包含層	13.4	3.3		外面:ナナメ沈線 口縁部キザミ	粗 長石 0.5mm粒多く含む	並	外:にぶい黄褐色 10YR5/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁 1/8	
33	005-03	弥生土器 壺	包含層	13.1	4.9		外面:タテハケ、ヘラミガキ 内面:ヨコハケ	長石 石英 金雲母 1～2mm粒含む	並	外:橙色 7.5YR7/6 内:橙色 5YR6/6	口縁 1/9	
34	028-03	弥生土器 壺	包含層	13.4	4.2		外面:口縁刺突文 頸部ヨコナデ 内面:ヨコナデ	やや粗 長石 石英 黒雲母 0.5～2mm粒含む	並	外:灰白色 2.5Y8/2 内:灰白色 10YR8/2	口縁 1/4	受口状口縁
35	002-03	弥生土器 壺	包含層	14.0	2.0		口縁部:折り返し後ナデ	粗 長石 石英1～5mm含む	やや軟	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁 1/5	表面磨滅
36	002-04	弥生土器 壺	包含層				外面:櫛描直線文	粗 長石 石英 0.7～2mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR6/4		
37	034-05	弥生土器 壺	包含層		6.9	頸径 5.6	外面:横方向の凹線、下部刺突文 内面:ナデ	並 長石 石英 0.5～2.5mm粒含む	並	外:橙色 7.5YR6/6 内:明黄褐色 10YR6/6	頸部 小片	
38	028-01	弥生土器 短頸壺	包含層	11.4	7.8		外面:口縁キザミ 頸部タテハケ、キザミ 内面:ヨコハケ	粗 長石 石英 黒雲母 0.2～6.5mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁 1/3	
39	015-05	弥生土器 壺	包含層	21.4	3.1		外面:タテハケ後ヨコハケ 口縁端面:ヨコハケ後ナデ 内面:ナデ?	並 長石 石英 0.5～1mm粒含む	並	橙色 7.5YR6/6	口縁 1/12	
40	001-01	弥生土器 甕	包含層	22.3	4.5		外面:タテハケ 内面:ヨコハケ、ナデ	粗 長石・石英 1～3mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁 小片	
41	005-01	弥生土器 甕	包含層	14.4	3.7		表面磨滅のため、調整不明	長石 石英 雲母 1～2mm粒含む	並	外:橙色 7.5YR7/6 内:明黄褐色 10YR7/6	口縁 1/10	
42	015-02	弥生土器 甕	包含層	24.0	2.0		外面:タテハケ 口縁端面:キザミ 内面:ヨコハケ	やや粗 長石 石英 微細粒～2mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁 小片	
43	025-04	弥生土器 高坏	包含層		4.0		外面:ヘラミガキ、凹線、貝殻刺突文 内面:ヨコナデ	並 長石 石英 0.5～2mm粒含む	並	外:明黄褐色 10YR6/6 内:明黄褐色 10YR7/6		
44	003-02	弥生土器 壺	包含層				外面:擬似流水文	長石 石英 砂 0.5～3mm粒含む	並	外:にぶい橙色 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	小片	
45	003-01	弥生土器 壺	包含層				外面:擬似流水文	長石 0.5～1mm粒含む	並	外:褐灰色 10YR4/1 内:にぶい橙色 7.5YR6/4	小片	

第2表 遺物観察表(1)

図版番号	登録番号	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	残存高	その他	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
46	003-04	弥生土器 壺	包含層				櫛描文？	長石 石英 1mm粒含む	並	外:にぶい橙色 5YR3/4 内:褐灰色 10YR4/1	小片	
47	003-03	弥生土器 壺	包含層				外面:櫛描文、ミガキ	長石 石英 0.5～2mm粒含む	並	外:黄灰色 2.5Y4/1 内:暗灰黄色 2.5Y5/2	小片	
48	016-02	弥生土器 甕	包含層		4.1		外面:擬似流水文 内面:表面剥離のため調整不明	並 長石 石英 小石 0.5～3mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:黄灰色 2.5Y5/1	小片	
49	015-03	弥生土器 甕	包含層	16.4	2.2		外面:タテハケ後、凹線 口縁端面:ヨコハケ後キザミ 内面:ヨコハケ	並 長石 石英 黒雲母 微細粒～2mm粒含む	並	外:暗灰黄色 2.5Y4/2 内:にぶい黄褐色 10YR5/4	口縁 1/10	
50	004-02	弥生土器 壺	包含層	15.2			外面:ナデ、ナナメハケ 口縁端面:刺突文 内面:ナデ？	長石 石英 小石 0.5～4mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/3 内:橙色 7.5YR6/6	口縁 1/7	
51	004-03	弥生土器 壺	包含層	15.4			外・内面:ヨコナデ	長石 石英 小石 0.5～2mm粒含む	並	外:橙色 7.5YR7/6 内:橙色 7.5YR6/6	口縁 1/7	
52	004-04	弥生土器 壺	包含層	14.6			外面:ナデ、刺突列点文 頸部凹線 内面:ナデ	長石 石英 小石 0.5～3mm粒含む	並	外:にぶい橙色 7.5YR7/4 内:橙色 7.5YR7/6	口縁 1/4	
53	034-04	弥生土器 壺	包含層	12.8	2.4		外面:タテハケ 内面:調整不明	並 長石 石英 雲母 0.5～3mm粒含む	並	外:浅黄橙色 10YR8/3 内:浅黄橙色 10YR8/4	口縁 1/9	口縁やや垂下
54	028-02	弥生土器 壺	包含層	23.4	8.4		外・内面:ナナメハケ	粗 長石 石英 0.2～7mm粒含む	並	外:赤褐色 2.5YR4/6 内:明赤褐色 2.5YR5/6	口縁 1/9	摩滅著しい
55	006-01	弥生土器 壺	包含層	19.2			外・内面:ヨコナデ 口縁外面:貝殻刺突文 口唇部:波状文	粗 長石 0.5～2mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁 1/8	
56	032-01	弥生土器 甕	包含層	18.0	3.3		外面:タテハケ 口縁端面:キザミ 内面:ヨコハケ	密 長石 0.3～0.8mm粒含む	並	外:にぶい橙色 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁 小片	
57	015-04	弥生土器 甕	包含層	18.4	9.6		外面:タテハケ、貝殻押圧文 内面:ヨコハケ 粘土接合痕	並 長石 石英 小石 1～3mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:明黄褐色 10YR6/6	口縁 1/4	
58	008-01	弥生土器 壺	包含層	24.2	4.3		外・内面:ハケメ 口縁端面:条線文	並 長石 石英 黒雲母 0.5～7mm粒含む	並	明赤褐色 5YR5/6	口縁 1/8	
59	004-06	弥生土器 壺	包含層	22.8			外面:調整不明 口縁端面:凹線、キザミ 内面:ヨコハケ	並	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/3 内:浅黄橙色 10YR8/3	口縁 1/7	
60	001-02	弥生土器 広口壺	包含層	20.2	4.6		口縁端面:凹線 口縁部:ヨコナデ 頸部:ナナメハケ	長石・石英 1～3mm粒含む	並	外:にぶい橙色 7.5YR6/4 内:橙色 5YR6/6	口縁 1/6	
61	024-01	弥生土器 壺	包含層		2.7		外面:ヨコナデ、ハケメ 口縁端面:凹線 内面:刺突列点文	並	並	外:浅黄橙色 10YR8/3 内:浅黄橙色 10YR8/4	口縁 1/8	
62	001-03	弥生土器 壺	包含層	18.6	1.6		外面:ナデ？ 口縁端面:2条の凹線 内面:刺突文、鷹状押圧文	やや粗 長石 石英 1～3mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁 1/7	
63	030-02	弥生土器 甕	表土	15.6	6.8		外面:ヨコハケ 頸部ヨコハケ 内面:ヨコハケ 体部タテハケ	やや粗 長石 石英 0.5～3.5mm粒含む	並	外:灰白色 10YR8/2 内:灰白色 2.5Y8/2		
64	016-01	弥生土器 台付甕	包含層		22.5	底径 4.0	摩滅著しく、調整不明	粗 長石 石英 小石 1～4.5mm粒含む	並	外:橙色 5YR6/6 内:橙色 5YR6/8	体部 1/3	
65	014-01	弥生土器 甕	包含層	14.1	22.3	底径 4.8	頸部外面:刺突文 体部外面:凹線、刺突文、波状文	並 長石 石英 砂 1～5mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁 1/4	
66	026-01	弥生土器 甕	包含層	18.2	26.0		頸部外面:刺突文 体部外面:凹線、刺突文、波状文	やや粗 長石 石英 雲母 0.5～1.5mm粒含む	並	外:明赤褐色 5YR5/6 内:橙 7.5YR6/6	口縁 ほぼ完形	
67	034-01	弥生土器 高杯	包含層		7.2		外面:タテハケ、ヘラミガキ 内面:ヨコハケ、ヘラミガキ	並 長石 石英 雲母 0.5～2.5mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/4 内:浅黄色 2.5Y7/4	受部 2/3	
68	030-03	弥生土器 高坏	包含層		7.6		外面:タテハケ 頸部凹線 内部:絞り痕あり	やや密 長石 石英 0.2～2mm粒含む		外:灰白色 2.5Y8/2 内:淡黄色 2.5Y8/3		
69	026-03	弥生土器 高坏	包含層		6.5		外面:ナデ、単位6条の凹線 内面:粘土紐接合痕	並 長石 石英 微細粒～1.5mm粒含む	並	明褐色 7.5YR5/6		
70	007-02	弥生土器 高杯	包含層				外面:条線文 受部内面:ヘラミガキ	長石 石英 雲母 0.5～4.5mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/4 内:明黄褐色 10YR7/6	1/5	
71	030-04	弥生土器 高坏	包含層		5.7		外面:タテハケ 脚部上部凹線	並 長石 石英 0.2～2mm粒含む	並	外:浅黄色 2.5Y7/4 内:浅黄橙色 10YR8/3		
72	025-03	弥生土器 高坏	包含層		3.1		外・内面:ヘラミガキ	並 長石 石英 微細粒～2.5mm粒含む	並	外:浅黄 2.5Y7/3 内:橙 7.5YR7/6		
73	025-02	弥生土器 高坏	包含層	24.6	3.2		外・内面:ヘラミガキ	並 長石 石英 微細粒～1.5mm粒含む	並	外:にぶい黄色 2.5Y6/3 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁 1/13	
74	030-01	弥生土器 広口壺	包含層	19.9	8.1		円形浮文 内面:ヨコハケ 頸部タテハケ、接合痕	並 長石 石英 0.2～2mm粒含む	並	外:浅黄橙色 10YR8/3 内:にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁 3/4	
75	031-03	弥生土器 台付甕	包含層		7.7	底径 9.2	外面:体部ハケ 台部ハケ、ナデ 内面:体部ハケ 台部ナデ	黒雲母 1～3mm粒多く含む	並	外:浅黄色 2.5Y7/3 内:にぶい黄橙色 10YR7/4	底部～台部2/3	土師器？
76	004-05	弥生土器 甕	包含層	20.8	5.5		外面:ナデ、4条の沈線 口縁端部:キザミ 内面:ナデ、ハケメ	やや粗 長石 石英 1～2mm粒含む	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁 1/10	
77	029-01	弥生土器 壺	包含層	16.6	6.8		外・内面:ナナメハケ 口縁端面:キザミ	並	並	外:橙色 7.5YR7/6 内:にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁 1/2	
78	029-02	弥生土器 甕	包含層	4.8	5.5		外面:ユビオサエ 内面:ナデ	やや密 長石 石英 砂 微細粒～1.5mm粒含む	並	明赤褐色 5YR5/6	脚部 7/10	
79	015-01	弥生土器 壺	包含層		3.9		外面:ハケメ 内面:ユビオサエ、ナデ、粘土紐接合痕	並 長石 石英 雲母 微細粒～1mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR7/3 内:橙色 7.5YR7/3	体部 1/6	
80	034-03	弥生土器	包含層		2.6		外面:タテハケ 内面:調整不明	やや粗 長石 石英 雲母 0.5～1.5mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:明黄褐色 10YR6/6	底部 1/3	
81	026-02	弥生土器	包含層		3.8	底径 6.1	外・内面:ナデ	並 長石 石英 黒雲母 0.5～1.5mm粒含む	並	外:にぶい黄橙色 10YR6/4 内:にぶい黄色 2.5Y6/3	底部 1/6	
82	004-01	弥生土器 壺	包含層			底径 7.0	外面:ナナメハケメ 内面:ナデ？	長石 石英 1～2mm粒含む	並	外:にぶい黄色 2.5Y6/3 内:黄褐色 2.5Y5/3	底部 1/3	
83	031-02	弥生土器 甕	包含層		4.6	底径 6.6	表面剥離のため調整不明	長石 石英 0.5～2mm粒多く含む	やや軟	外:にぶい黄橙色 10YR6/3 内:にぶい黄橙色 10YR6/4	底部 1/4	
84	033-01	陶器 箱形湯呑	包含層		6.0	底径 3.4	施釉、外面に呉須による菊花文	密	良	素地:灰黄色 2.5Y6/2	口縁 1/5	
85	008-04	陶器 箱形湯呑	包含層	8.0	5.8		施釉、外面に呉須による菊花文	密	良	灰白色 2.5Y7/1	1/4	
86	039-01	寛永通宝	表土	径 2.8								
87	032-02	陶器	包含層	15.4	2.2		外・内面:ロクロナデ 体部外面:施釉	密	良	にぶい褐色 7.5YR6/3	口縁 1/8	
88	011-01	円形加工陶磁製品	包含層	6.4	1.8			密	良	灰白 5Y7/1		瓦使用
89	008-05	陶器 土鍋	包含層			底径 8.6	外面:ヘラケズリ 内面:施釉	並 長石 0.5mm粒含む	並	外:灰白色 2.5Y8/1 内:褐色 7.5YR4/6	底部 1/5	
90	009-01	陶器 土鍋	包含層				外面:ヘラケズリ 内面:施釉	並	並	外:灰白色 2.5Y8/1 内:淡黄色 5Y8/3		

第３表　遺物観察表（２）

Ⅳ 結　　語

1　「東村城跡」について

本調査区を含む丘陵尾根部は、通称「権現山」と呼ばれ、「伊勢輯雑記」や「北勢雑記」、「伊勢名勝志」、「治田村誌」などによりその存在が知られてきた中世城館「東村城」に比定されてきた。しかし、今回の発掘調査で明らかになった遺構は奈良時代及び、鎌倉時代のもので、出土遺物の中にも戦国期のものを確認する事はできなかった。

しかし、調査区を含んだ尾根の上部にはテラス状の平坦面が広がること、調査前の地表観察では尾根の先端部にまで帯状のテラス部が巡っていること、今回の調査で検出した浅い溝の痕跡は調査区北の尾根先端部でも確認する事ができること、の３点から、当尾根上には土塁は現存しないものの廓を想定することは可能ではある。（第６図参照）

周囲の台地から突出した調査区を含む尾根部からは直下の員弁川流域の水田地帯をはじめとして、北西東の３方向にかなり広範囲にわたって視界が広がる。この地から視野に入る中世城館は５つを数える。そして、員弁郡内の中世城館の多くが員弁川を眼下に望む段丘上に位置しており、この尾根部も中世城館の立地としては好条件を満たしていると言える。また、調査区の東斜面で検出した帯状のテラス部分は城に通ずる犬走り状の通路として理解できなくはない。

東村城については、『伊勢名勝志』、『伊勢輯雑記』、『北勢雑記』など江戸時代末期から明治期の地誌に取り上げられている。戦後出された『治田村誌』にはこれらの記述を基に近年の状況をも知ることができる。もちろん、これらの地誌の多くは、軍記物などを引用しており、書かれている内容自体の史実の価値は乏しいと言わざるを得ないが、これらの記述を整理すると文献にみえる「東村城跡」は、当調査区を含む尾根上とは考えられない面もある。

つまり伊勢名勝志・治田村誌では、東村城跡は、東村字神ヶ崎にあるとしている。神ヶ崎はこの尾根の南の丘陵上の小字を指している。また、伊勢輯雑記・北勢雑記では、駒井氏の「宅地」となっていると書かれている。当調査区では、近世の宅地の遺構は検出されていない。また、治田村誌には、「楠の下荘跡」として「右の城址（東村城跡）内の小高い所にある」とあり、円福寺の東方に位置することも記述されている。

東村城跡の調査が進展するなかで、神ヶ崎地内を踏査したところ、円福寺のすぐ東に四方を土塁で囲まれた城館跡と考えられる遺構を発見することができた[①]。（第２図　44）「駒井さん宅」との伝承もあり、文献の記述とも一致する。遺構の規模は、南北90m×東西63mである。虎口は南西隅にあり、南側の土塁が西側の土塁のさらに西に回り込み、くい違い虎口といえる。（第５図参照）土塁は、幅1.4～2.2m、高さ２～4.4mである。

こうしたことから、現段階では、東村の本城、あるいは居館が神ヶ崎にあり、当調査区は東村城に関連する出城ないしは見張り場的な支城と推定される。

2　遺構について

今回の調査では奈良時代および鎌倉時代の遺構が確認できたわけであるが、これらの遺構の性格を考えるにあたっては、調査区の立地における特色が有効となりそうである。

隅丸方形土坑（ＳＫ１）は、時期は出土した須恵器をもとに、８世紀と考えることができる。その平面プランからは竪穴住居の可能性も考えられなくはないが、丘陵上の立地ということ、同じ台地上には同様の遺構の存在や同時期の遺物の分布がないこと、出土遺物が日常生活的なものと考えにくいことの３点から、住居跡とは捉えにくい。立地的に見晴らしの良好な条件を備えていることと、埋土に多量の炭が混入していたことから、狼煙場や見張り場であったということも想定できなくはないが、飛躍が過ぎると思われる。したがって、遺物や人頭大の石の出土の状況と土坑の南東隅周辺が特に被熱していることからから考えて、浅く掘り込まれた土坑の中に人頭大の石で浮かせて棺を置き荼毘に付した火葬墓、

或いは火葬に伴う施設と考えるのが妥当であると思われる。

鎌倉時代の中世墓（ＳＸ２）は、遺構の残りが悪く本来の形状を知ることはできなかったが、山茶椀と刀子を埋葬する中世墓であることを確認することができた。この他の時期不明の土坑（ＳＫ３・４・５・８など）も中世墓の可能性はあるが確証は得られなかった。

当遺跡の立地する丘陵の南東直下の平地には権現坂遺跡が所在する。権現坂遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物が見つかっている。その集落との関連を考慮すると、集落の西に位置するこの高台が墓域であった可能性が考えられる。

東村城跡から出土した須恵器については、権現坂遺跡および郡内の古窯跡出土の須恵器と併せて胎土分析をおこなったが、サンプル量も限られており、明確な答を得るには至らなかった。しかし、いずれにしても猿投窯の特色と在地的な特色との混在がうかがえ、共通点を見いだすことは容易である。

弥生土器の出土量は微量であり、時期も多期にまたがっているが、員弁郡内では弥生土器の資料に乏しいので、貴重な資料といえる。今回の東村城跡の調査では、調査区内に弥生時代の遺構は検出できなかったが、調査区を含む丘陵上に弥生時代の住居あるいは墓の存在が想定できよう。調査区の南東直下の権現坂遺跡では、弥生土器はほとんど出土してはいない。しかし、員弁川流域の低地から少し隔たった段丘上に弥生時代の集落および墓が立地することは大安町の宮山遺跡[②]の調査結果からも伺える。

（清水）

（註）

① 伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現状」『研究紀要　第６号』三重県埋蔵文化財センター　1997 年

② 竹内英昭ほか『宮山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999 年

この他下記の文献を参考とした。

・『伊勢輯雑記』　著者は員弁郡丹生川村（現、大安町）の松宮祐重（1787～1846）。　近年、三重短期大学教授の田中欣治氏により活字化されている。（田中欣治「伊勢輯雑記と松宮祐重」『月報三重法経セミナー』1991～）

・『伊勢名勝志』　著者は宮内黙蔵。昭和 49 年に三重県郷土資料刊行会により復刊されている。

・『治田村誌』　編纂者は近藤　杢。昭和 57 年に第二刷が発行されている。

・『北勢雑記』

写　真　図　版

PL1

調査区遠景（東から）

調査区遠景（北から）

神ヶ崎地内の城館（東から）（楠の下荘跡）

神ヶ崎地内の城館（南から）（楠の下荘跡）

調査区全景（左上が北）

調査区全景（東から）

SD11 ～13（北東から）

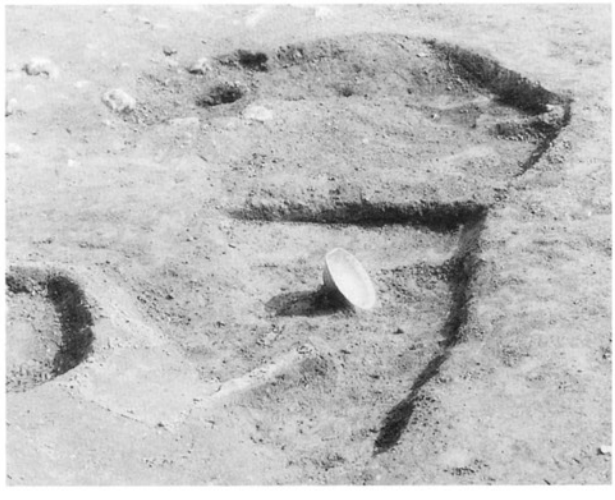
SA９・SD11 ・12（北から）

SD13・14（北から）

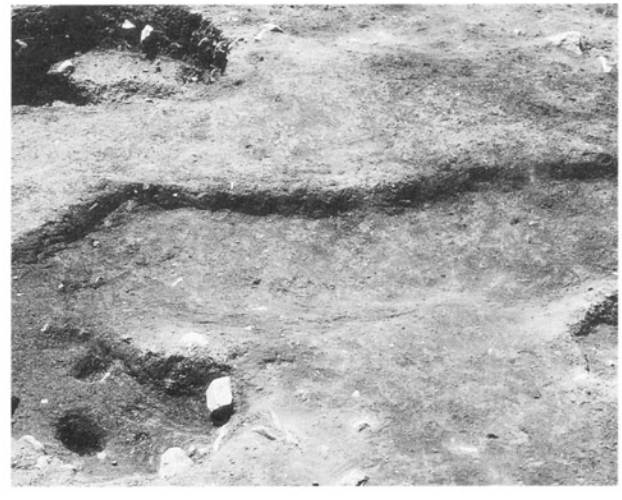
SK１完掘前

SK１遺物出土状況

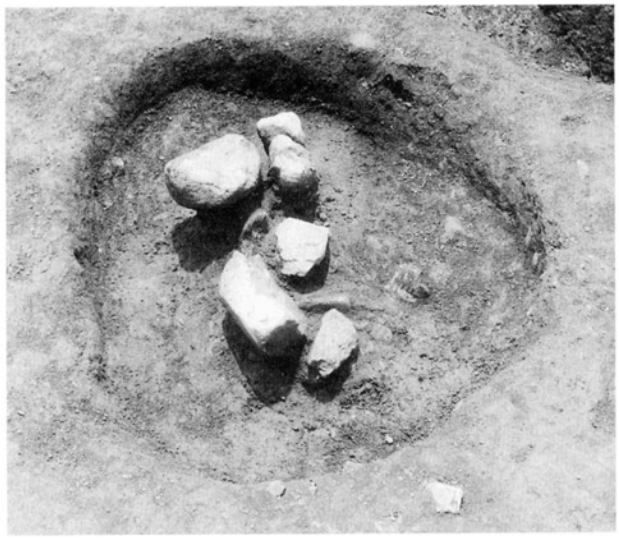
SK１完掘状況



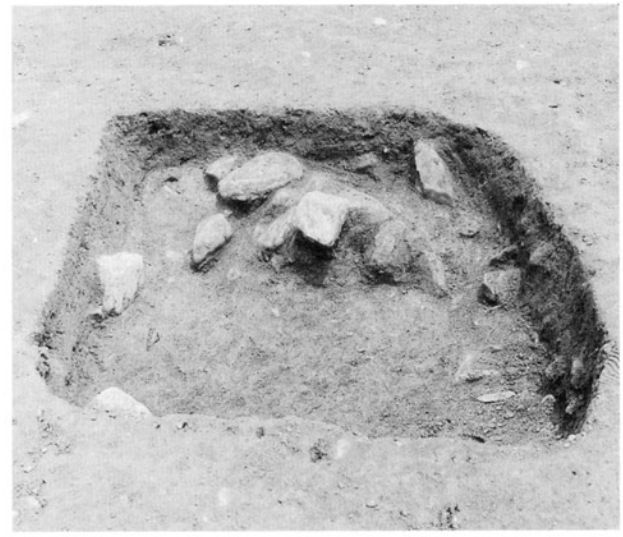
SX２遺物出土状況



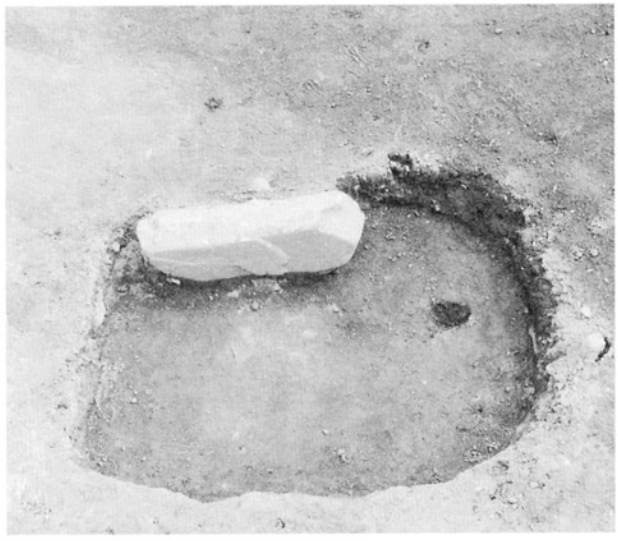
SX２完掘状況



SK 3

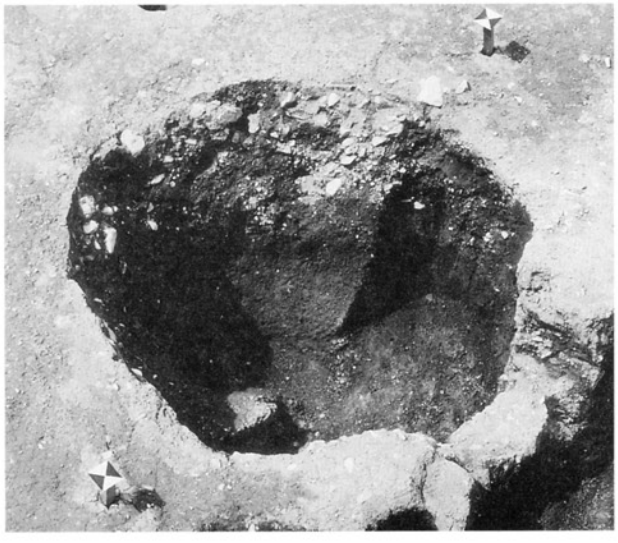


SK 8



SK 4

SK 5



SK 7

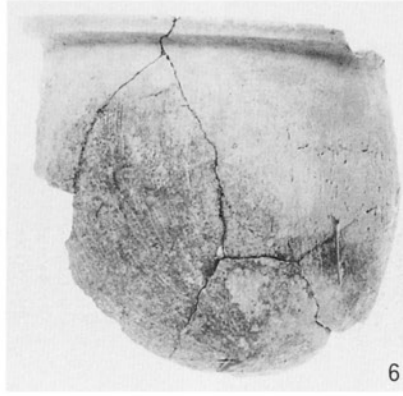
作業風景

2

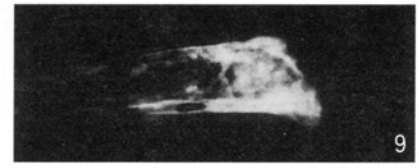
3

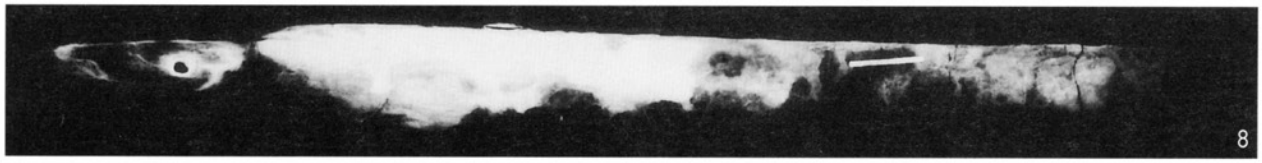
4

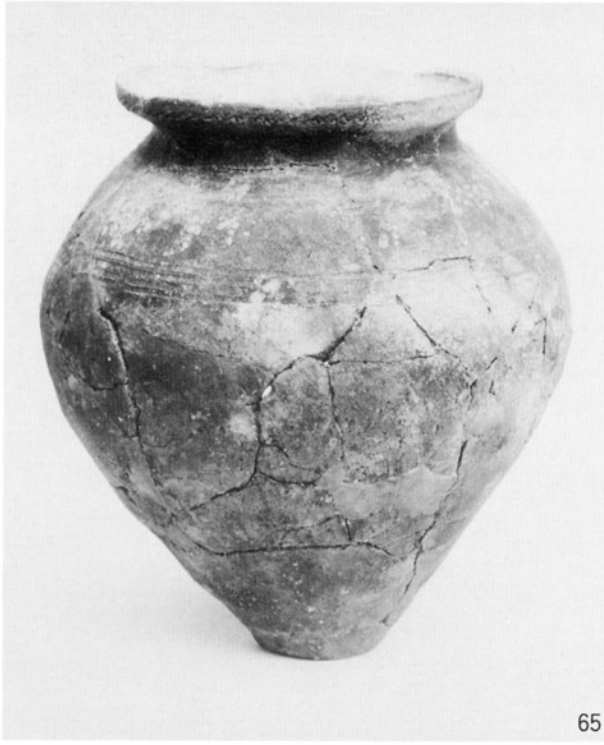
5


6

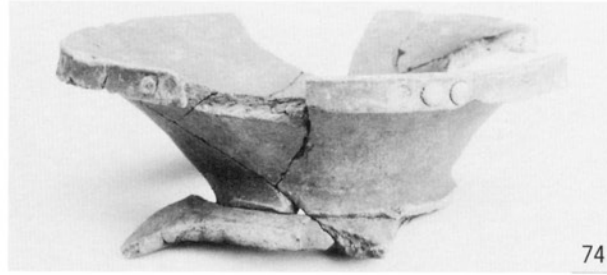
7


9

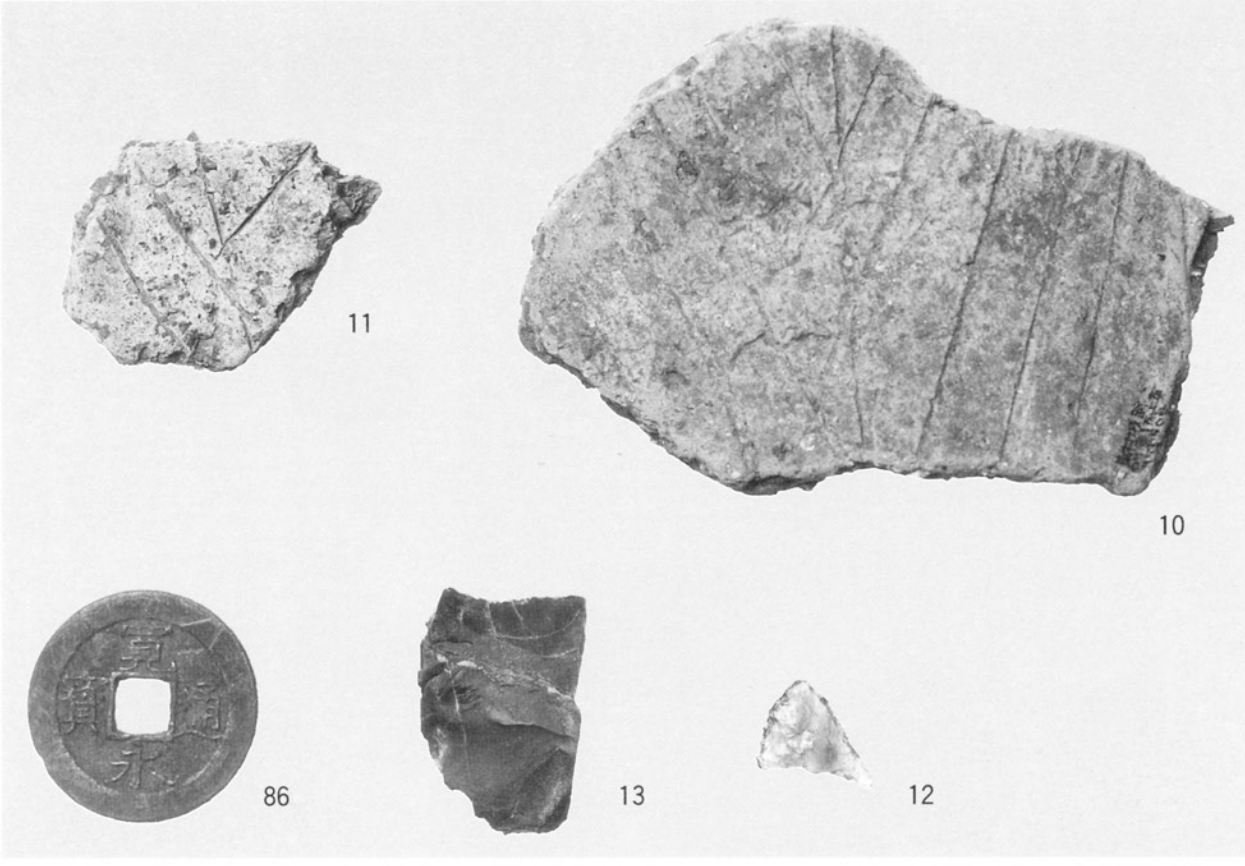

8


65

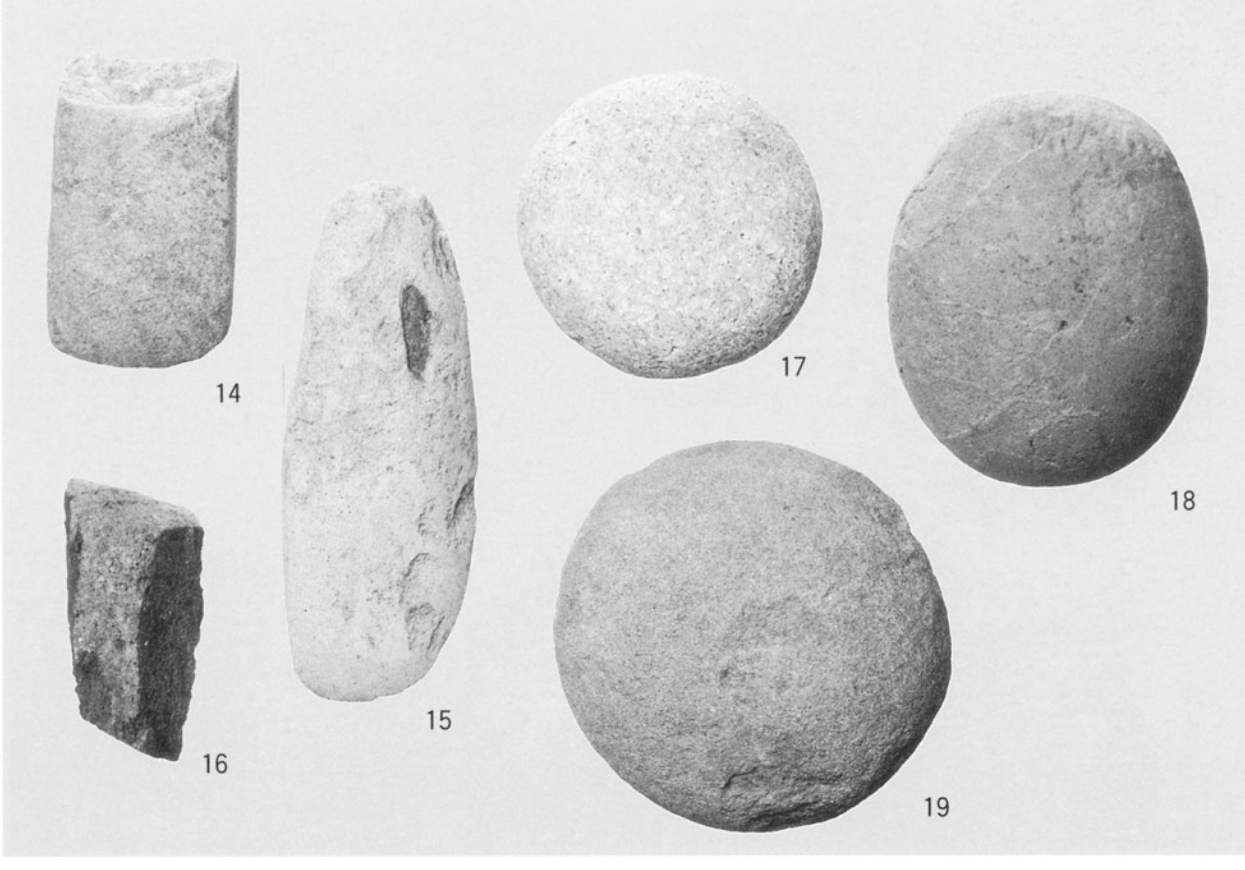
66


74

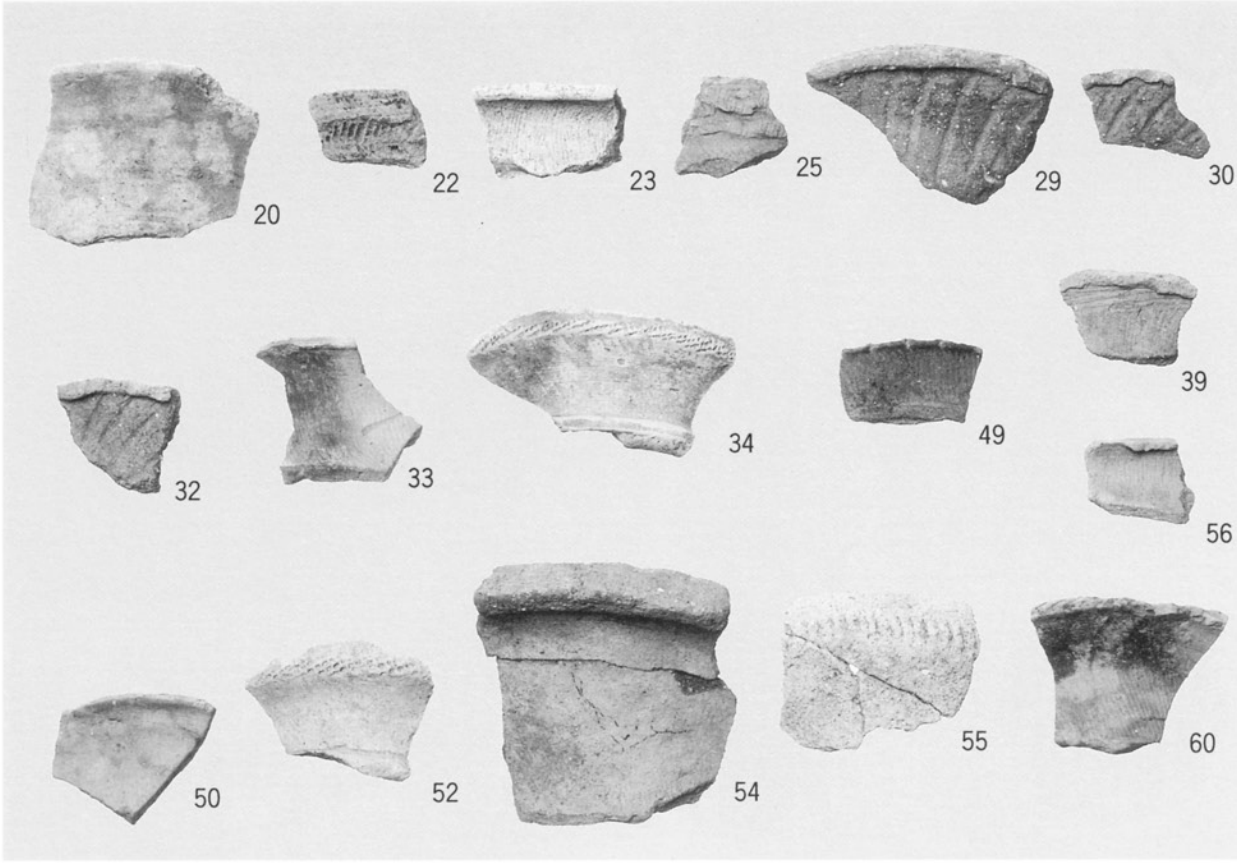
SK１・SX２・包含層出土遺物



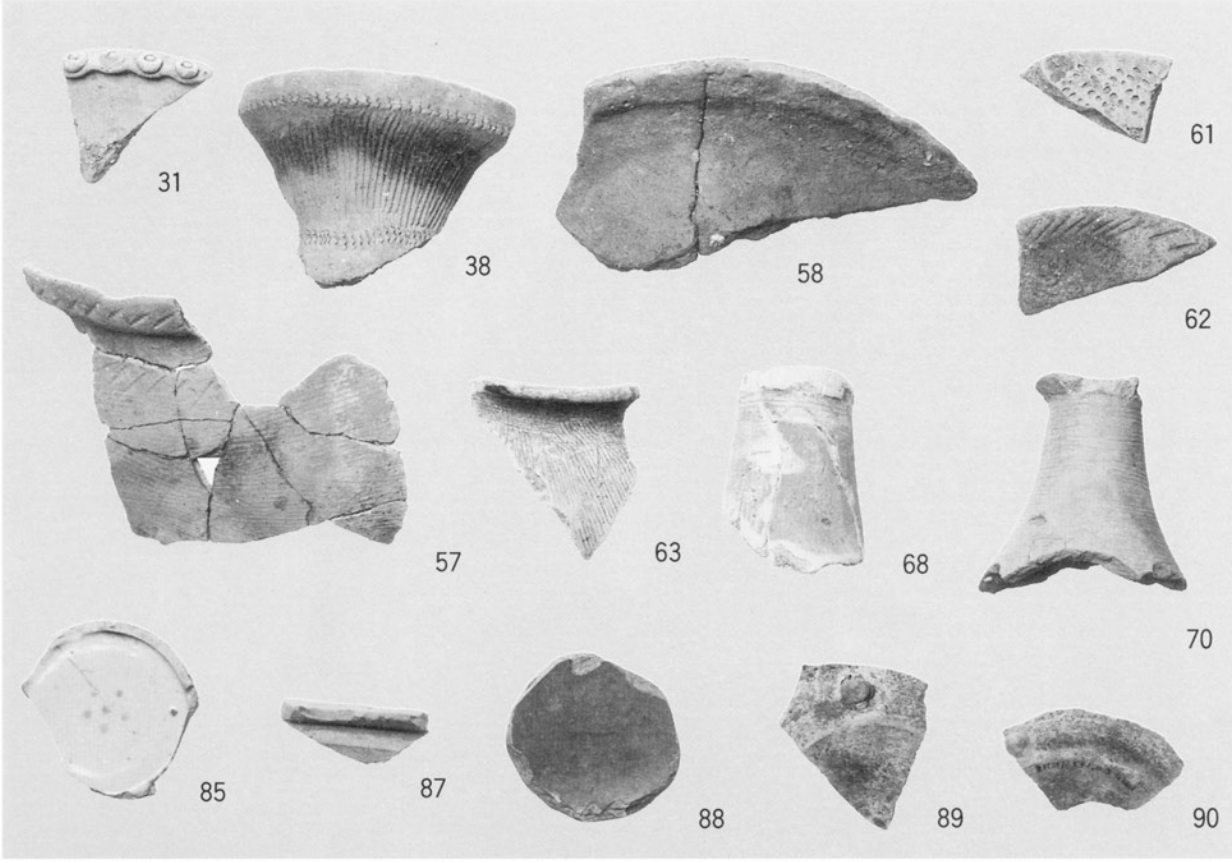
包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物　（61・62・85 は内面）

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどうよんひゃくななじゅうごごうとうかいかんじょうじどうしゃどう ひがしむらじょうしはっくつちょうさほうこく
書名	一般国道475号東海環状自動車道　東村城跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	186－1
編著者名	清水弘之　今尾宏記
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦　2000年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
東村城跡（ひがしむらじょうし）	三重県員弁郡（みえけんいなべぐん） 北勢町東村（ほくせいちょうひがしむら）	24321	45	35° 8′ 15″	136° 31′ 12″	19940809 ～ 19941101	2,020	一般国道475号東海環状自動車道建設事業に伴う事前調査
						19950420 ～ 19950630	1,130	
						19970918 ～ 19970919	80	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東村城跡	集落跡・城跡	奈良時代・鎌倉時代	溝・土坑・テラス状遺構・土塁状遺構	須恵器・土師器・山茶椀・刀子	包含層より弥生土器出土

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 186－1
一般国道475号東海環状自動車道

東村城跡発掘調査報告

2000. 3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　(有) 第一プリント社